が出來ないやうな境遇に身を置かれた女――さうした女と清は別れて來た。

知つてからもうかれこれ一年になる。其間に其女はいろいろな話をして聞かせた。東武鐵道の停車場のある田舍町に居たこともあれば、海の見える芝の高臺に住んで居たこともあつた。後には何も彼も隱さず話した。田舍に居る頃世話になつた若い豪農の若旦那の話もした。

初めて逢つた時には、濃い勝色の衣に芭蕉の模樣の大きく出た帶をしめて、若々しい扮裝をして居た。庇髪にして居る時もあつた。銀杏返しに結つて居る時もあつた。御を離れた海岸の道を二人して並んで歩いた時には、畠にそら豆の花が白く咲いて居た。海水浴場のある處から松原を拔けて、小高い丘の上に登つて行くと、其丘の上には石のお

宮があつて、海が其處からぐるりと見渡された。二人は眺め盡した。

其海水浴場は青年時代に清がよく出懸けて行つた處であつた。西さんと來たこともある。田邊と來たこともある。肺病患者のやうな蒼い顏をして松原の中を一人で歩いて居たこともある。磯には依然としてその時分の綺麗な清水が湧いて居た。

小豆貝といふ赤い小さい貝があつた。これは西さんが『妹わすれ貝』と歌に詠んだ貝で、夕暮の散歩には、きまつて拾つたものであつた。女と二人で行つた時も矢張其の赤い小さい貝を探して歩いた。

『あの時、田邊のことを考へたつけ……もう其人は居ない』

清は車窓に迫る夕暮の色を見ながら、かう思つた。かれ

は旅中に校訂する爲めに、鞄の中に田邊の『日記』を入れて來て居た。

上郡といふ驛を通つたのはもう夜中であつた。清はそれでも起上つて、窓をあけて、闇の中の小さい停車場の灯を見た。其處から十三里の山奥の町、其處に敏子を訪ねたのは、二年前の秋の晴れた日であつた。

汽車は絶えず駛つて居た。

耶馬溪の谷では、かねて清に手紙を寄せたり文章を見せたりした一青年の墓に詣でた。志を抱いて死んだ青年の墓は其家の裏山の奥にあつた。老いた父母は緑の高い風通しの好い座敷で、細々と其時のことを話して聞かせた。門の前の深い谷には、鮎を釣つて居る男が其處にも此處にも見

えた。

其青年はロマンチイツクな空想に憧れたり、白い萩の花に愁を寄せたりする人であつた。さうした心持は清には殊に分明と解るやうに思はれた。境遇に依つてある人の運命は開け、あの人の運命は閉られて行つた。

東京へ東京へとあくがれたその二階の一間からは、隣の田舍寺の鐘樓と庫裡とを隔てゝ、幾重かさなる山々の翠が見渡された。寺の庭には、九連草や天竺牡丹などが明るい夏の日影に照されて見えた。

父母は土地で出來る卷柿を解いて、それを巴渦のやうに切つて、古い盆に載せて、わざわざ子息の墓に詣でに來て呉れた東京の客に勧めた。

客は京都で女連と並んで歩いた人とは丸で別の人のやう

であつた。暑いのと不便なのとで、洋服と靴とは鞄の中に藏つて、白地の浴衣にヘコ帶をしめて、京都で買つた山桐の安下駄を穿いて居た。金縁の眼鏡のピカピカ光るのが、門の處で草を取つて居た母親の眼には異樣に映つた。朴訥な父親の眼にもつくろはない見馴れない姿が、常に道つて來る旅の商人か何ぞのやうに見えた。『ちつとも存じませんだでな……失禮して』後には濟まなかつたものゝやうに、幾度もかう言つて申譯をした。

昨夜日が暮れて馬車で着いた旅館屋は、すぐ下に溪流の見下ろされるやうな位置にあつた。灯の周圍に山の蟲が無數に集つて飛んで來るので、何處の家でも、洋燈は軒に出して吊して置いた。馬小屋では一日石ころ道を走つて來て疲れて飢えた馬が體をハメ板にこすり附けたりモンモン糞

を嚙んで居たりした。其傍の圍爐裏では、髮を箒のやうにした上さんがせつせと櫛にさした鮎を燒いて居るが、活々と起きた火に、其顏は照反されて赤く見えた。子供等は蚊の刺すのにも頓着せずに、ごろごろと其處等に寢て居た。半ば袒になつた爺は解らぬ言葉で、馬車の別當と何か聲高く話し合つて居た。

『福岡の病院から戻つて御出の時は、もう餘程わるかつたんですねえ。父さんに手を曳れて此處で一寸休んで行きやした。學者だッていふになア』宿の女中はかう言つて、其青年のことを話して呉れた。

馬車は四角な六人乘で、石の多い道をガタガタと駛つた。耶馬の谷から大連に遁げて行かうとして、門司で追手に捕へられた十七八の娘は、色の白いほつてりした綺麗な顏を

して居た。連れて歸つて行かれるのが別に苦勞のやうにも見えなかつた。繭買らしい男に立場で氷水を御馳走して貰つたり、雜談口を聞き合つて笑つて居たりした。

中津から宇佐に行く汽車は、耶馬溪の山々と海岸との間にある平野の間を駛つた。卓のやうな山からは、白い雲が簇々と湧上つた。宇佐に行く間の大きな川の船橋の渡船小屋には、腰の立たない爺が居た。

檻の樹が丘から丘に續いた。『此頃は螢蠶が盛で、檻は駄目になつた』と車夫は話して聞かせた。さまざまの人やさまざまの人の生活が眼に映つたり消えたりした。

宇佐の太鼓橋の中にある古風な旅館の二階の一間は廣かつた。隣の間の若い二人づれは新婚旅行の人達らしく見え

た。空色の袖のついた襦袢や、處々汗にぬれた絽の單衣や、ズボンやワイシャツなどが一緒に前の欄干に並べて懸けられた。語り合ふ聲は低かつた。

此旅館には花崗石の立派な風呂があつたり、柑橘の大きな水があつたり、何處となくさびしい顏をした上品な上さんが居たりした。膳を運んで來る女中も丁寧であつた。遠い昔のことが思はれるやうな一夜であつた。

蚊帳の中で、清は『日記』の二十六年の條を校訂した。空想に富んだ二十二三の青年の感激が到る處にある。『痛切に宇宙の事象に觸れざるべからず』かういふ風なことが殆ど毎日のやうに書いてあつた。眉の濃い顏の細い眞面目な元氣な田邊が清の眼の前を歷々と浮んで通つた。清は頑みながら傍に置いた色鉛筆を取つて、誤字を直したり疑問點を

打つたりした。頼んで一枚明けて貰いて貰つた雨戸の間からは涼しい風が入つて來た。

翌日も車、馬車、峠から見た海――それも別府近くなると、趣が全く變つた。夕立の烈しく降る間を、ある立場で待つて居ると、二階ではだらしのない姿をした女が三人も四人も其處に白い顔を出して、降頻る雨を見て居た。奥からは皷や三味線の音が賑かに聞えて來た。温泉の匂ひ、白粉の匂ひ、賑かな明るい町がやがて其前に展けた。

埠頭近い細い通りには、小さい温泉宿が軒を並べて居た。何處の家でも客が一杯で、四疊半一間すら、一人で占領することが出來なかつた。其處では、海は三階の隅の六疊に四十位の地方の人と一緒になつた。夕飯の時には、麥酒のコップの遣り取をした。其人はこれから四十里ばかり離れ

たある役所の屬吏で、兼ねて此地の温泉を久しい間心に懸けて、漸く遣つて來たといふ話をして聞かせた。隣の間に行李を持つて來て居た。その細君は幼兒の泣くを賺しながら、子守唄を歌つたりなどした。濡れた襦袢が縁側の隅につかねられてあつた。

埠頭の夜は明かつた。夏蜜柑、氷水などを賣る肆が其處にも此處にもあつた。灯が波に映つてチラチラした。人々の待ちに待つた汽船はやがて來た。汽笛が更けた海に震へて聞えた。

端舟の船尾には提燈が一つポンヤリ薄暗く點いて居る。夜は暗かつた。沈むかと思はれるほど荷物や客を載せた大きな傳馬は、暗い波を搖かして靜かに出て行つた。

清はやがてその沖の汽船の甲板の上に立つ人でおつた。其處から見た別府の湯の町は、灯にかゞやいて居た。

夜明には、汽船はもうひろい海に出て居た。岸を縫つた低い山の裾には、小さな港があつたり、さびしい漁村があつたり、帆を揚げた小さい船が通つたりした。海には波頭が白く連つて見えた。

汽船はある小さい島の傍を通つた。漁師の家が二三軒其處にあつた。網が竿にかけつらねてあつた。家根からは朝炊の烟が細々と立のぼつた。かうした海の唯中の離れ小島にもライフがあつた。

海は染めたやうに碧であつた。晴れた日影が風を帶びた波頭にキラキラと碎けた。

甲板の上に立つて居た清は、

『もう、佐伯はぢきですか？』

油と煤烟と塵とで黑光に光つたボオイにかう言つて訊いた。

佐伯の港はもう近かつた。其處等あたりの島の上には、薄い鼠色の交つた白い雲が低く靡いた。汽船は段々島と陸地との間にある入江の中へと進んで行つた。

『佐伯の町は船から見えますか』

『船のつく處から一里位離れて居りますから町は見えませんん』

かう傍の人が敎へて呉れた。

田邊の『日記』には、この佐伯港のことが詳しく書いてあつた。田邊は二十六七年の頃に、英語の敎師として此處に

一年以上も來て居た。清は其話を田邊の口から聞いたことも幾度かある。地方の青年を相手に、ウォルズウォルスの詩集を抱いて、熱い涙を流したことや、弟と一緒に大入島に船でわたつて行つたことや、可愛い娘の子の家によく遊びに行つたことや、紀州といふ乞食が居たことや、其他いろいろなことをよく話して聞かせた。日光の山の中の、谷川を前にしたある寺の二階の一間で、その遠い海岸の話を聞いた時のことは今でも明かに清の頭腦に殘つて居た。田邊は漁師の家の明るい灯に見入つて。『此處にもライフがある』といつも深い思ひに撲たれたといふ。その一青年の姿が今見えるやうな氣がする。

次第に近寄つて來る佐伯の港を、清は深い感を抱いて見ぬ譯には行かなかつた。

大入島はすぐ其前に横つて居た。帆を揚げた船が其處にも此處にも見える。碧い海と蒼い空と、遠くに連る山々の襞に照り渡る日の影と、それを前にして、白い新しいペンキ塗の汽船は、埠頭を距る五六町の處に來て停つた。

舵機が廻轉する度に、海は白い碧い沸騰した泡をもくもくと底から湧かせた。

白い服を着た巡査が一人、埠頭から來る端舟に乘つて居た。町は低い山の陰になつて見えなかつた。埠頭には、旅館らしい大きな家が二三軒並んで居て、其前に俥が五六臺置かれてあつた。

下りる人々は汽船の左舷の處に集つて立つて居た。鞄を持つたものもあれば、風呂敷包を背負つたものもあつた。大分から暑中休暇を國に歸る庇髮の女學生も三四人は居た。

女工の群も交つて居た。

端舟が左舷に廻ると、人々はぞろぞろと下りて行つた。上から卸す荷物を下から手を延して受取るものもあつた。庇髪の娘はほッとしたやうに亂れた髪をかき上げて居た。端舟が客と荷物とを積み終つて、汽船を離れると、舵機がまた動き出して、碧い白い水の泡が再び船の周圍に盛んに沸騰した。暑い夏の日影がそれにキラキラと眩しく照る。

十分後には、汽船は既に其港外に出て居た。清は甲板の上に立つて別れて行く港にじつと見入つた。一生の中再び來ることもあるまいと思はれる港に。

日向の海岸の道には、馬車が時間で立場から發つやうになつて居た。松並木の間からは日向灘の波がをり〳〵白く

見えた。

縣廳のある町に近づいたのは、もう午後四時を過ぎて居た。ある立場からは、バナマの古く汗に滲んだ帽子を冠つた洋服の男と、これも矢張背廣を着た三十二三の男と、透綾の羽織を着た商人風の男とが乘つた。背廣の男はある旅から歸つて來たといふ風で、バナマ帽の男に頻りに其話をして聞かせた。

『椎葉の山の中はそんなにひどいですかな』

『ひどいッて何のッて、それはお話になりやしません。路なんてないやうな處を歩くんですから、』

『よくそれで東京の人は歩いて行きましたな』

『え、中々足の達者な方で……見かけによらん人でした。事務官などは隨分弱つて居りましたけれど……』

『で、今日は延岡からですか』

『え、縣の境まで送つて行つて別れて來ました。事務官は一緒に別府まで行くッていふことでした。』

『今度來た人は、若くつて中々學者だッていふことですねえ』

『え、氣の置けない話が旨い人でした』

『中央政府から來た人のお伴も中々大變ですな』

パナマの男は慰め顏に言つた。

中央政府の役人に椎葉の山の中までついて行つたといふ縣廳の屬官は、日に燒けた黑い顏をして、いかにも疲れたといふ風に見えた。これから家に歸つて、一日二日緩り骨やすめをしなくつては仕方がないといふやうなことも言つた。今一人の商人風の男は、『實業の世界』といふ雜誌の頁

を繰返して、成功談だの苦心談だのを讀んで居た。かねて知合つた間柄らしく、三人は土地の話をしたり、旅の話をしたり、雜誌の話をしたりした。『成程此雜誌は廉い』などと言つて、パナマ帽は見終つた雜誌を商人風の男に返した。

馬車は風のある埃の立つ暑い田舍道を駛つた。

この人達と相對して腰を懸けて居た淸には、段々その中央政府から來た役人の誰であるかが解つて來た。それは疑ひもなく鹿兒島から此の縣に來た西さんであつた。縣の屬官はその前に大隅の南部から日向の西南部を經て、鵜戸を通つて、宮崎に歸つて來たことなどをも話した。

『鵜戸は好い處ですよ。是非行つて御覽なさい』

後には淸にかう言つて聞かせた。

『その東京の人は、町の橋の傍の旅籠屋に泊つて居ました』

こんなことも言つた。

西さんは到る處で講話をしたり、演說をしたりした。此の縣では殊に評判が高かつたらしい。「あんなに若くつて、あれで中央政府の好い處に居るんですからなア」かうした話が絶えず三人の間に繰返された。清は西さんのことを考へたり、田邊のことを考へたり、かうして田舍に生活をして居る人々のことを考へたりした。

十三四年前に戀だの、空想だの、藝術だのと言ひ合つて、本郷の通を並んで歩いた青年とは丸で別の人のやうに思はれた。

其夜清は橋の傍の旅籠屋に泊つた。宿帳には果して西さんの名が書てあつた。一週間前まで此處に居た人のことがなつかしかつた。

二十一

何故か敏子のことが頻りに考へられた。

それは鵜戸に行く海岸の道であつた。其少し手前の港までは馬車が來るが、それからは草鞋ばきで歩かなければならぬやうな處であつた。崖のやうな處だの、磯と島との間に淺い汐がさし込んで居る處だの、漁師が椿の樹のかげで網を繕つて居る處だの、暗い木かげの川の中で男が手を洗つて居る處などが續いた。

鈴虫や松虫の鳴いて居る叢もあつた。

碧い晴れた午前の空に、明るい日影がかがやき渡つた。清は胸の緊縮されるやうな悲哀を覺えた。何故涙が誘ひ出されるのか自分にも解らなかつた。

若い時から感情的であつた。それを撓めたり抑へたりして世を渡つて來た。今ではさうした感情が起る度に屹度自ら批判しては自ら罵るのが例になつて居た。感情に心を全く開いたやうなことは何年にもなかつた。それが今、此の海岸の明るい日影に漲るやうに押寄せて來た。

敏子に對する自己の心の狀態を考へる時には、清はいつも自から耻ぢた。それに打克つことが出來ないといふのが一つ。さらば何故に全力を擧げないかといふのが一つ。それは境遇から來るといふよりもむしろ性質から來る。感情に心を任せて了ふことの出來ない性質から來る。

『かうした師を持つたのが敏子の運命だ』

歩きながら清はかう思つた。

『先生には一生離れない。ねえ、奥さん。ほさんと呼ばせて下さいな』清と清の細君との居る前で、敏子はこんなことを言つたことがあつた。それを清は今思ひ出した。

海岸の道は長くもあり險しくもあつた。峠を越えると、其處に彎曲した渚が開けた。渚には汐入川があつたり、漁船が磯に上げられてあつたりした。渚を越えると、路はまた峠へと懸つて行つた。

此處は七浦七阪と呼ばれる處であつた。

阪に懸る度に、染めたやうな碧の海が前に開けた。この海にのみ――このひろびろとした限りのない海にのみ自己の心が全く開かれるやうに清には思はれた。

途中から道連れになつた郵便脚夫は、丈の高い大きな男であつた。港まで郵便物を持つて行つて、今歸る處だといふ。鵜戸まではもう二つ峠を越さなければならないといふことも話した。

二人は並んで歩いた。

郵便脚夫は途中で大きな木の枝を折つてステッキにしたりなどした。前の村で頼まれて來た出產の報知を持つて行つた家には、大きな椿の木が涼しい蔭をつくつて居た。其蔭に湧いて居る此處等でも珍らしい冷たい清水に、清は渴いた口を當てた。

西さんは廿日ほど前梅雨の降頻る頃、鵜戸から港へと此道を通つた。途中の川に水が出て、それを渡るのが容易でなかつた。濁つた水が海の碧に流れ落ちるさまを歌によんで、それを端書に書いて寄した。其同じ道をかういふ風にして清は歩いて行つた。

敏子のことを矢張思つて居た。

二十二

霧島山の半腹にある旅舎からは、櫻島を隔てゝ遠い海が見えた。其處ではかれは大海の唯中の孤島に居る昔の友に手紙を書いた。『新橋の停車場にて別れたる君と小生との運命のかくの如く相隔らんとは其時思ひ懸けず候ひし。小生は今君の故郷にあり。猶これより百里を隔てたる海上の君を思ふの情に堪へず候』こんな文句が其中にあつた。清は其他にも繪葉書をあちこちに出した。敏子に宛てたのもあつた。

京都で一緒に歩いた女には、『こんな山の中を歩いて居る』と書いた。

鹿兒島では、これも矢張十二三年も逢はなかつた昔の友が旅館に訪ねて來た。暑い日影のキラキラするのを前にして、二人は何から話して好いか解らなかつた。懇の爲めに世を犧牲にした此友の頭にはもう白いのが交つて居た。あの時分――かう言つて二人は餘念なく語り合つた。

膳を並べて午飯を濟してから、友は清を城山公園に案内した。登り口で、『もう此處には何年にも來たことがない。さう……』かう言つて考へて、『さう……東京に行く前に來たきり、登つたことはありませんよ。』それほどかれは世に疎く暮して居た。

『君は子供はあるんでしたかねえ？』

かう清が聞くと、

『いゝえ、一人も……』

笑ひながら言つた。

評判に立てられた細君にも逢ひたかつた。しかし友は連れて行かうとはしなかつた。『僕の家など暑くつて仕方がない』かう言つて、かれは海岸の松の中の料理店に清を伴れて行つた。

翌々日は清はもう球磨川の流を下る人であつた。凄じく水珠のあがる瀬は到る處に開けた。一人は十八九、一人は其弟と思はれる顔のよく似た十五六の二少年が、舳先と船尾に居て櫂を巧に使つた。清のして聞かせる東京の話を熱心に耳を傾けて聞いた。重つた山は流に從つて段々開けて行つた。

其開けて海近くなつた所に八代の町があつた。征西將軍宮の廟のある町、それ以上に其町は清には緣故が深かつた。其處にはかれの父の墓があつた。

肥後八代横手村——

祖父の口に、母の口に、幾度それが繰返されたか知れなかつた。『成長くなつたら一度はお參をしなくつてはいけない』七八歳の頃から清はかう言つて聞かされた。父親は丁度今の清の年齢に此處に來て、御船附近の戰爭を彈丸を胸に受けて死屍となつて野に横つたのであつた。

停車場から町に行く土手には、櫨の樹が涼しい蔭をつくつて居た。やがて古い汚い狹い町が其處に開けた。三十年前に父親が軍服を着て通つて行つた町と同じであることは、その古い家並が明かにそれを證據立てゝ居た。清はいろい

ろなことを考へずには居られなかつた。

三十四で後家になつて、大勢の子供と老人とを抱へて、故郷の小さい葉茸家にさびしい生活を送つた母親、力にした一人息子に別れて、長い間を田舍の緑側の隅に送つた目の盲ひた祖母、一家の爲めに志を犧牲にした兄――それ等の人々は皆なそれぞれ異つた生活を得て、短かいライフの中に泣いたり笑つたりして過ぎて行つて了つた。車に搖られて町に入つて行つた清は、今年七歳になる男の兒のことを考へて居た。

官修墓地は町はづれの街道から見える處にあつた。笠のやうに雨方から蔽ひ冠さつた松並木の奥に、風雨に曝された古い門が見えて、周圍にはぐるりと柵がめぐらしてあつ

た。蔭のツンツン生えた向ふには、朝露を帶びた緑の莖の葉の中に紅白の花が高く低く咲いて居た。

墓地を預つてゐるのは、それから街道を少し行つた處の鍛冶屋の隣の饅頭屋の爺であつた。花を手にした清と線香と鍵を持つた爺とは、荷車が通つたり田舍の上さんが通つたりする街道を並んで歩いた。門をあける鍵の音がガチャガチャと音を立てた。

中は綺麗に掃除がしてあつた。入口に野梅が二三本あるばかりで、蔭を成した木とてもなかつた。中央にある隊長の大きな墓を前にして、同じ形の墓が幾通りも列を成して並んで居る。父親の名を發見するのも容易でなかつた。

『何と仰るんです？』

爺はかう訊いて、『あゝ、さういふ名がありましたつけ。

何でも此方の方だと思つて居ました』

爺は心當りの方を探しに行つたが、やがて其墓の所在を知らせて呉れた。其前に立つた清は心を動かさない譯には行かなかつた。其處には父の名と隊の名と戦死した場所と年月とが刻んであつた。

父親の戦死が原因となつた一家の不幸――それももう今では終を告げた。祖父母も死んだ。母も死んだ。一家の犠牲になつた兄も、轗軻不遇の一生を汚ない病院の一室で熱にうかされてうは言を言ひながら死んで行つた。清にしろ、軍人の弟にしろ、今では人の夫となり、人の親となつて、其前には既に新しい生活の道が開けた。卅年の月日は短くはなかつた。

清の胸には追懐の情が漲り渡つた。母や兄の顔が其處に

も此處にも見える。田舍の藁葺家も見えれば、母の死んだ原の中の一軒家も見える。殊に父の忌日毎に石招の幅を床の間にかけて、八重櫻を花瓶に生けて、兄弟三人してお祭をした時のさまが鮮やかに眼の前にあつた。

墓に供へた線香からは細い細い煙が颺つた。白く乾いた土の上には、ゐぞ菊の紅や紫が際立つて見えた。

清は墓前に跪いた。

やがて立上つて、隣の墓石の上に置いた夏帽子を取つてかぶつた。夏の日はもう暑くなり出した。かれは門の處で草を拷つて居る爺の處に來て、何か二言三言言つて居たが、それもほんの僅かの間であつた。やがて笠松の間から街道の方へ出て行く其の姿が見えた。

一時間後には、かれは旅館の一間に歸つて居た。電報用

紙を旅鞄の中に探つて、それに、『タヾイマチ、ノハカニモウヅ』と書いた。遠い處に居る軍人の弟に知らせてやらうと思ひ立つたのである。

やがて此處あたりに特色の赤い襷をした眼の綺麗な十六七の女中が、その電報用紙を受取つて、トントン音を立てゝ階梯を下りて行つた。

百日紅が鮮かな色を見せて居る二階の一間であつた。

二十三

旅から清が歸つて來た頃には、都にもう涼しい風が立つて居た。庭の隅にある鶏頭花は夕日に赤かつた。

留守中には別に變つた事もなかつた。敏子が度々訪ねて來たことや、裾廻しを直すと言つて晴衣を一抱へ風呂敷に包んで持つて行つたことや、此間も帶を持つて行つたことや、書齋に長く入つて何か片づけものをして居たことや、沈んで鬱ぎ切つて絶えず蒼い顔をして居ることなどを細君は話した。しかし歸つた二日目に來た時には、瀧縞のセル

の單衣に金茶色の帶を緊めて、庇髪を綺麗に結つて、別にさういふ風にも見えなかつた。清のする旅の話を面白がつて聞いて、常に似ず元氣よく笑つて行つた。

『今日は久し振にていろいろ御話を伺ひ力を得候こと一通りにては無之候ひし。御話の中に人はいかなる生活の中にもあり得らるといふ御言葉、自づからの生存に價値を認めよとの御言葉、いかなるライフなりともそはわがライフなりとの御言葉、いづれも染々と胸に殘り申し候』翌日清は敏子からこんなことを書いた端書を受取つた。

出勤の途中、電車の停留場の手前で、敏子が向ふから歩いて來るのに邂逅した時には、敏子は餘程近くに來るまで清の來たのを知らずに、物思ひに耽つたといふ風をして歩いて來た。髪も亂れたまゝにしてあつた。顏も蒼かつた。

『何うかしたんですか？』

『いゝえ……』

其聲には狼狽したやうな處があつた。

清の通ふ途中の橋の畔に自働電話があつた。堀端を廻る電車が其前を通つた。向ふには煙草屋だの雜誌屋だのが見えた。他人の聞くことを憚るやうな電話を懸ける人がいつも其處に入つて行つた。夜など若い女が一人で長い電話を懸けて居ることもあつた。清は此處に來ていつも電話を懸けた。其家の電話の番號を白い壁の隅のところに鉛筆で小さく書いて置いた。

返事の來るのを待つ間、電話器を耳に當てゝ、向ふの煙草屋の店の色白の娘を見るのがいつもの例になつて居た。其時はグワンと何かで頭を打たれたやうな氣がした。京都

を一緒に歩いた若い方の女は、病氣で家に歸つて居て、此間は逢はれなかつたが、今日こそ是非逢はうと思つて遣つて來た。その女がもう居なかつた。先月限り廢業いて了つたと其電話は言つた。

一年間、別に深く思ふといふほどでもなく逢つて居た。さうした種類の女に眞面目な心を求めるほどかれはもう若くはなかつた。自分でも寧ろ淡すぎると思ふ位の心を持つて居た。しかし打突かつて見なければ解らなかつた。歎かれたといふやうな怒りが其時烈しく起つて來た。

想像は更に其影を大きく見せた。濃くも見せた。自働電話を出て、電車の停留場に行くかれの顏には肉の顫動が見えた。

「本當に病氣なのだらう」

かう思ひたかつた。しかし何うしてもさうは思へなかつた。

停車場で別れた一幕が今は喜劇となつてかれの眼に映つた。かれは自分で自分を罵つた。

旅から出した繪葉書を取返して破つて捨てたかつた。

二十四

暑中休暇に國に行つた敏子の兄は細君を連れて近い中に歸つて來る。それと入れ代りに敏子は房州の海岸に一月ほど行つて來たいなどと言つて居た。

其處には敏子の同窓で、油繪を研究して居る友達が行つて居た。

『何だが夏中こつちに居ましたら、體がすつかり惡くなつて了つて……何處かに少し行つて來ないでは勉强も何も出來ませんから』

かう言つて、其處の友達から寄した端書などを敏子は見せた。

ある日、清が社から歸つて來ると、細君は、『今日、敏子さんが愈〻房州に行くんだッて、荷物を取に來ましたよ』

『荷物？』

と清は意外な氣がした。

『一時頃來ましてね、先に送つて置くんだッて、……車もう頼んで來たんだつて、それは忙しさうでしたよ。何だか變だッた、今日は』

細君の顏にも疑惑の色が見えた。

『荷物を持つて行くとは大袈裟だね』

かう言つた清は、洋服をも脫がずに書齋に入つて見た。机は其儘にしてある。本も其儘にしてある。しかし重なる

衣裳や何かの入つた行李は三箇ともなかつた。寝道具もなかつた。

清はその跟跡を探すやうに彼方此方を明けて見て、座敷から再び玄關の方へと行つた。玄關の上り口の縁には、重い物を引摺つた痕が二條も三條もついて居た。

『それで、別に何とも言はなかつた？』

洋服を脱ぎながら、清は妻に訊いた。

『何だか、そはそはとして居ましたよ。それに丁度其時、整子がやかましかつたものですから、其方に行つて居られなかつたですけれど……敏子さん一人で、セイセイ言つて行李を運んで居ましたッけ。』かう言つて、すぐ後を續いで

『いづれ出懸ける前には一度來ますッて言つて居ましたよ。何うせ又來るんだけれど、少し長く居たいからッて……先

生によろしくッて言つて行きました』

『そしてすぐ歸つた？』

『私が整子に此處で乳を飲ませて居ると其處から顔を出して、それぢや奥さんッて言ふから、まア好いぢやありませんか、今、もう整子が寝るところですから、お茶でも飲んで入らつしやいッて言ふと、でも俥と一緒に行かなけりやならないからッて、急いで歸つて行きました。』

『小石川の兄さんはもう歸つて來たのかしら？』

『いゝえ、まだなんでせう』

清は一服吸つた煙管を長火鉢の縁でトンとはたいて、

『何だかをかしいね』

『本當に變でしたよ』

しかしこれ以上に二人は何も言はなかつた。清は此頃體

の具合が惡かつた。脚氣から起る神經性の不安が絶えず頭を惱まして居た。少しのことにも心臟の動悸が高くなつた。京都に伴れて行つた年取つた方の女は、廢業した女の內情を、話して好いことだけ話して聞かせた。

年の若い方の女はそれでも一度電話を清にかけて來た。

『是非一度御目に懸り度いと思ひましたんですけどもねえ……今、私、富岡前の自働電話で懸けて居るのよ』こんなことを言つて、世話になつた禮を長々と言つた。

敏子が荷物を持つて行つた翌日は、灰色に空は曇つて、秋風が肌へに冷々した。午後に郵便箱を探つた清の手には、敏子から來た端書が讀まれた。

鉛筆で走書をした其端書には、『小石川の電車の終點にて

敏子』としてあつた。

『先生には是非今一度御目に懸つて御話仕度存候ひしも、事情の爲め、此儘お別れ致さねばならぬことと相成申候、房州にまゐり候やう御話仕候へども其處には參り申さず候詳しくは手紙にて』これを讀んだ清の胸は震へた。

『こんな端書が來た』

かう言つて、清は妻にそれを見せた。夫婦は顏を見合はせた。

『一體何うしたんでせう』

細君がかう言つたのは、暫く經つてからであつた。二人は默つて周圍を振返つて見た。思ひ當るやうなことが其處にも此處にもあつた。『何うしたんでせう一體、これぢやまだよく解りませんけれどもねえ』と夫の顏を見て、『身を隱

したんでせうか』

『何うもさうらしい。』かう言つた清は、激昂したやうに頭を振つた。

『馬鹿な奴だ！』

少時してから清はかう言つた。しかしこれは敏子を罵つたのか清自身にも解らなかつた。

清は敏子を隔てゝ其男と相對したやうな氣がした。事情の爲め――かう書いてある。事情？事情？其陰には、其男の姿が歴々と映つて見えた。

今までのことが分明と頭に入つて來た。其男の握つた絲に敏子があやつられて居たさまが明かに浮んで來た。

細君と長火鉢にさしむかひに坐つて居たッて仕方がないやうな氣がして、其の端書を持つたまゝ、清は書齋に來て

机の前に坐つた。机の上には書き懸けた原稿紙が展げてあつた。それは今日中に書いて終はなければならない原稿であつた。清は苦しい胸を押へて、筆を手に取つて見た。いつものやうに、其苦しみを藝術に遁れて見やうとした。しかしそれは駄目であつた。

少時してから細君が行つて見ると、清は其端書を傍に置いたまゝ、兩臂に机に立てゝ頰杖をして、障子に向つてぢつと空虛を見詰めて居た。

外には秋雨が蕭々と降つて居た。

夕飯を知らせに來た時にも、清は矢張障子を見詰めて居た。

夕飯は默つて食つた。

それが濟んでから、

『それにしても一體何うしたんでせうねえ？』

かう細君が訊くと、

『何うしたんだか、己に解るもんか』

清の聲は尖つて居た。

『本當に身を隱したんでせうか』

『さうだらう』

『身を隱さなければならないやうなことがあつたんでせうか』

『そんなことは己には解らん』

『敏子さんも困つた人ねえ』

かう細君は心から言つて、『本當に、あの男の人と一緒に行つたんでせうか。さうなら、さうと言つて呉れゝば好いのに……よく話して呉れへさすりやそんなことを爲ないだ

つて好いのに……』かう言つて考へて、『此間もその積りで荷物を取りに來たんですねえ』

敏子と其戀人と自分との心理狀態が一歩深く內部に入つて行つたやうに清には思はれた。『それが言へないから身を隱したのだ。寧ろ男がそれを女に實行させたのだ――』かう思つた清は辛かつた。

二十五

手紙がやがて來た。

別れの手紙であつた。世話になつたお禮と身を隱さなければならぬ理由とが長々と書いてあつた。『先生の御恩の萬分の一をも報せず、藝術をも捨てゝ、實際の巴渦の中に入つて行かねばならぬ身を御免し下され度候』かういふ風な書き方で、二枚も三枚も續いた。

『これもいろいろ煩悶致し候結果に有之、これより他に私には出て行く道もこれなくと存候まゝ、やむを得ず決行仕

つり候次第に有之候、……思ひつめ候ことも一度や二度にはこれなく候へども、父母もあり兄弟も有之候身には、なき後の恥辱も思ひ殘されて候ふて、自由にならぬ身を悲しみ申候』こんなことも書いてあつた。

小石川の宅から出したことにしてはあるが、消印は芝としてある。清は頭腦の廻轉するやうなのを覺えた。女の所行の大膽と言ふことよりも、恩知らずといふことよりも、自分の持つて居るものを奪ひ去られたといふやうな無念さが胸につき上げて來た。

『馬鹿な奴だ！』

かう言つて清は下唇を嚙んだ。

頭の中は嵐のやうであつた。いろいろなことが想像された。なき後の恥辱！よくそんな空々しいことが書けたもの

だと思つて、冷笑して遣りたかつた。何處かの二階の一間で、二人して自分を笑つて居るのが歴々と見えるやうにさへ思はれた。房州、無論房州に行つて居ないことは解り切つて居る。さうかと言つて、消印のある芝にも居る譯がない。身を隠した處から友達に頼むなり、自分で出かけて行くなりして投函したに相違ない。前から計畫して、踪跡を晦ますやうに企んだに相違ない。女を信用して十分な監督をしなかつたことが今になつて後悔された。

絶えず煩悶して蒼い顔をして居ながら何一言もそれに關しては打明けて相談らしいことを言はなかつた。『先生に知れないやうに——』女はかう言つて居たに相違ない。『先生に縋つて居た爲めに、此前は、失敗した。今度は少しでもそんなことを知らせては駄目だ。他まで秘密に事を運ぶや

うにしなければいけない』かう男は女に勧めたに相違ない。

清は頭の毛を拐りたかつた。

『馬鹿な奴だ！』

かう再び叫んだ。

しかしこれは瞬間であつた。激した心が次第に意識を恢復して來ると、今度は敏子の身を中心にしていろいろな想像やら、推測やらが起つて來た。同情も起つて來た。

子が親や監督者を離れて、男に從つて行くあはれさといふことも考へられた。

『先生に御迷惑を相かけ候ことは何よりも大なる罪と存候兄の宅より身をかくし候ことをせめてもの好機會と存じ候ふて、急に決行致し候ことに御座候』手紙の中にこんなことが書いてあつたのを清は思ひ出して黙然とした。

女の一生といふことが染々考へられた。

敏子の家出を報じた清の手紙と行違ひに田舎の父親からの長い長い手紙が來た。清に宛てたのと同じやうな封書を敏子は田舎にも送つた。

清は敏子から來た封書を其儘に中に卷込めて田舎に遣つたが、父親からは、敏子が送つた手紙を丁寧に寫して、それをその中に添へて寄した。

父親の手紙は半紙に達者な字で書いたのが三枚、營業用に使ふ半枚摺の罫紙に書いたのが一枚猶ほ言ひ盡されないと言つたやうに、紙の斷片に書いたのが一枚、それを一緒にピンで綴ぢて、封筒には切手をベタベタと張つて、嚴重な書留にしてあつた。

激昂した心が歴々と其の手紙の上に見えた。平生に似合はない思ひ切つたやうなことが書いてあつたり、娘を一人東京に出した自己の不聰明を悔ゐたり、かうした娘が其家から出たのを恥ちたりした。

『娘の恐かさ加減、想像にも及ばず、小生一時は五里夢中の心地致し、手、物を落すまで慙愧仕候』かうした文句で其手紙は始つて居た。

其處には親の慈いた心が隱すところなく顯はれて居た。清の作品が惹き起した問題から、敏子と其戀人との關係、當時の追想、二月以前に上京した時の狀況、さういふことが繰返して書いてあつて、かゝる不穩裁を呈するに至つた動機を一面敏子に、一面清の監督の行屆かない處に置いた。

『畢竟今春貴臺より責任ある書面に對し、且つは當人も十

分の責任を以て身を處すとの誓言有之候故、出京致させ候次第に候ふに、別紙の如き不始末、不憚裁、實に申しやうもこれなき次第と存候』

激昂しては、次のやうにも書いた。

『本人の不始末より生涯の目的を誤りたること故殘念ながら今は唯行末までの勘當を致し候より他に、處置すべき道も無之候、上京の節、如何にしても馬橋に呉れぬといふことならば、自己に呉れよとの貴臺の御話し有之候、其時、貴臺にならば差上げてよしと申候、今は唯一刻も早く貴臺に送籍仕つり候他に致し方これなく候、さりとて表面戸籍を送り、陰に馬橋に配偶せしむるならば、九死の下瞑する能はず候』

また次のやうに慨嘆した處もあつた。

『案に違はず、獣慾に陷り、累代曾てなき不始末の行爲を敢てし、人に嬢と呼ばれたる身を以て、無教育のものも猶敢てせざる不始末を實行するとは……性慾は自然のものなりと言ふやも知れざれど、人道を忘れ、親の恩を忘れ……この事を耳にして以來、母親は枕を上げ得ず、涙をすら自由に流すことも出來申さず……』

田舍では名譽ある家庭、其身は田舍の女學校の顧問として良家の子女をも預る地位にあることを父親は猶縷々として書いた。同じことが繰返し繰返し書かれてあつて、それが容易に盡きやうともしなかつた。長い手紙の中には、慈愛深き父親として、名望ある一家の主人として、また狹い田舍に住める一紳士としての感情が其處にも此處にも明かに見えた。

敏子の手紙には、清に寄した手紙にないことが一つ書いてあつた。『いつそ自から身の處分を仕り度と煩悶仕つり候へども、醜き體を衆人の前に曝し、此上にも恥辱を一家へ與へ候ふに忍びず候ふて――』

敏子は懷姙してゐた。

醜い體――

それが最も烈しく清の頭を刺戟した。ぢつとしては居られないやうな氣がした。

指を折つて、かれは月の數を數へて見た。敏子の上京したのが四月、今月までまだ六箇月にしかなつて居らなかつた。手紙の文句から考へると、懷姙したのは上京して間もない頃であつたらしかつた。

其時分と思はれる時のことが早く眼の前に浮んで通つた。清の家に來て居た頃、兄の家から電報が來た頃、山田といふ男の友達が迎へに來た頃、確かにその頃であつた。

新宿の町外れに汚い館屋があつた。其處に近郊の散歩から歸つたらしい若いある二人づれが入つて行つたのを清は見たことがあつた。其館屋の閉め切つた二階が見えるかと思ふと、今度は柏木あたりの雜木林の若い綠の中から男と女とが二間位離れて出て來るのが眼に見えた。近郊には若い男と女との爲に備へられたさうした家が其處にも此處にもあつた。踏切に近い處に赤い毛布を繰臺に敷いて、休茶屋らしく見せて、そッと座敷を貸す家もあれば、雙の爺婆が藁葺家の奥の一間を客に明渡して知らぬ顏をして近所に出て行つて了ふ處などもあつた。二十錢、三十錢位で時間

を仕切つて貸すところもあつた。

中野あたりの停車場前の小い飲食店、それから段々奥に入ると、かなり奥深い林が林へと續いて居た。麥畠にはをりをり百姓が草を採つて居る位のもので、細い路を歩いて來る人は稀れであつた。日の光が鮮やかに林の綠にさし透つて、喜びがあたり一面に漲り渡る……何處に行つても、二人は自由なことが出來た。

下宿屋の一間、其處でもさうした一幕は容易に演ぜられた。若い青年の群は、其處此處から氣に入つた相手を選んで伴れて來て、平氣で自分の一間に入れた。其處には麥酒の饅だの、食ひ散らした餅菓子の竹の皮などが一杯に散ばつて居た。其處では歌を唄ふことも出來れば、酒に醉ふことも出來た。何んなに自由な放縱な行爲をしても、誰もそ

れをとがめるものはなかつた。

その自由な境から女は深い淵に落ちて行くのを知らなかつた。快樂の後に悲痛が來るのを知らなかつた。

新聞紙上に其頃毎日のやうに掲げられた女學生の墮落の記事——それを田舍の父親は前から心配してゐる。その記事をわざわざ切拔いて送つて來たことがある。それを見て敏子は笑つた。清も笑つた。それからまだ半年も經たなかつた。

私生兒、それを父親は烈しく呪つて來た。何んなに隱したつてそれは隱し了せるものではない。屆けもしなければならない。本籍をも名告らなければならない。萬一不心得のことでもあれば、それこそ刑事上の罪人になる。それこ

そ私等一家は世間の顔向けが出來ない。『一刻も早く送籍の手續あらんことを此際達つて願上候』かう書いて來た。

モウパッサンの作に『アバンドンド』といふ短篇があつた。ある上流社會の令嬢が海岸のさびしい家の一間で私生兒を生んだが、その私生兒を四十年も經つてから訪ねて行くといふことが書いてあつた。訪ねて行く處も面白いが、さびしい海岸で、懐姙した令嬢が波の音を聞きながら暮して居るさまがいかにも鮮かに描いてあつた。清はそれを思ひ出した。

もう四月……ことに由ると、五月になつて居るかも知れない。懐姙した女の狀態を清はかねてよく知つて居る。押へ難い幽鬱の思ひ、些細なことに苛々する神經の不安、ことに絶えず動搖する感情――其處にはもう美しい夢のやう

な戀はない。他から想像するやうな花やかなロマンチックな戀はない。清は敏子が父に伴れられて初めて來た時の鮮やかな色彩の多かつた姿と蒼い灰色をした艶のない顔をした懐姙した姿とを比べて見ぬ譯には行かなかつた。梭のやうに段々織り込まれて行く運命の中にかうして過去つて行く敏子の青春がそゞろに憐まれた。

經驗のない初產の苦痛を海岸のさびしい一間に、一人して味はなければならない不幸な女が歷々と眼の前に浮んで見えた。

しかし清は何うすることも出來かねた。搜索をしやうと思へば、それはいくらも方法はある。人を頼んで、內々此方彼方を探して見ても好い。けれど探し出して連れて來たところで仕方がなかつた。

それに狀況の解らぬといふことが尠くとも多くの不安を清に齎らしたに相違なかつた。細君の他には默つて一言も他に洩さなかつたが、向ふから何んな事變が起つて來るか解らなかつた。思詰めた揚句の死！そんな空々しいことが一時は冷笑したが、敏子のやうな神經性な空想的な女には、其狀況の如何に由つてさうした悲劇の一幕は演じられないとは限らない。清はさうした一幕を想像する度に、敏子の運命に及ぼした自己の責任を深く感じた。

朝毎の新聞紙をかれは注意して見た。女の投身とか縊死とかといふ記事のある度にかれは胸を轟かした。

時にはまたこれで一生逢ふことがないのではないのかと思ふこともあつた。コルシカ島に身を隠したフランスの貴族の令嬢と其の戀人とは、白髮になるまで其姿を人に示

さなかつた。二人にはさうしたロマンチックな幕を打つことは出來ないには相違ないが、しかしさうした幕は打つて貰ひたいやうな氣もした。何處にも居ない、何處を探しても居ない、年月はその間に經過して行つた。思ひかけない山の中か海岸の荒磯かでゆくりなく邂逅した時は、二人はもう老いて、腹の中の兒が成長くなつて居た……。

二十六

清が第一に行つたのは、小石川の敏子の兄の家であつた。兄は二階の一間で清に逢つた。其處には卓だの椅子だのが飾り立てゝあつた。兄は微笑を顔に湛えて、綺麗に頭髪を分けて居た。『私が歸るその日の朝出て行つたんですから、更に樣子はわかりません。私が歸つてから行つたら何うですッて婢が達つて留めたさうですけれど、それまでは待つて居られないッて言つて出て行つたさうです。何うも仕方がありませんな、まア言はゞ當人の自業自得ですから……

放つて置くより他に仕方が無いでせう』かう言つて兄は笑つた。

『何うも一體我儘で仕方がなかつたです。私や親達がいくら喧しく言つたッて駄目なんですから』

こんな風にも言つた。

先月中は、上野の圖書館に通ふと言つて、毎日弁當を拵へて、朝早くから出懸けて行つたさうである。十時過に歸つて來たことも一二度はあつたさうだ。荷物を持つて行つた話を清がすると、『いやそれは持つて來ません。それは屹度何處かに送つたんでせう』かう言つて兄は考深い眼色をした。

『東京に居るでせうか』

と清が訊くと、

『いや、東京には居ないでせう。屹度何處か氣の附かないやうな田舎に行つてるでせう……』かう言つて考へて、『けれど餘り騷がん方が好いでせう。探し出して見たところで仕方がない。伴れて來て置く譯にも行かない。男の狀況を見て居さへすりや、自然と其所在が解りますから、餘り騷いで新聞にでも書かれると困るですから』

『さうですとも』

かう言つた清は、存外兄の平氣なのを嫌らず思つた。

田舎の父親から來た手紙の話をやがて清は持出して、『私は籍を送つて來ても、それは構はんですが、何うしても馬橋にやるのは厭だ、籍を送るのは送るが、馬橋に遣るのなら一生の憾みだと言はれては、何うも私も困るですな。父さんから馬橋にやるのは厭だから、僕に籍を移して、此問

題を解決しやうと言ふのなら解つて居ますが――』

かう言つた清は胸のつまるやうなある重い壓迫を感じた。敏子の爲め――清はかう思つてこの問題を解決しやうとして來た。

『何しろ父が非常に激昂して居るやうですから』、落附いた調子で兄は言つた。暫くしてから、『……さうですとも、當人同志が好いものなら、何も我々がそんなに喧しく言ふ必要はない。もうさういふ狀態になつたんだから、當人達の好いやうにさせる方が好いです。父には折を見て猶さう言つてやることにしませう。……けれど、これで田舎では烏渡厄介なんです。門地だとか、名譽だとか、いろいろ喧しいことがあるもんですからな、東京に住んで居る人には烏渡呑込ないやうな處がありますよ』

この敏子の兄の快活な明るい調子は、清の耳に快く響いた。何處かかう同じ年代の血が流れて居るやうに清には思はれた。話がすぐ中心に觸れる。心もよく解る。

歸りは夜になつた。電車の中から雨にぬれた町の灯が明るくチラチラと搖いた。さびしい秋の夜であつた。

清は何うすることも出來ないやうな位置にあつた。如何なる煩悶も自から處分しなければならないのがかれの此頃の狀態である。『敏子の爲めには、いかやうな犧牲をも拂ひ申すべく、小生に相應せる靈力は辭する處にあらず候』かう田舍の父親に宛てゝ書いた時には清は泣きたかつた。

書齋の前の梧桐の葉は朝に夕にがさがさと音を立てた。背後の丘の工場の煙突の煤烟は西風に渦を卷いて、機械の

動く音が手に取るやうに分明と聞える。丘から丘に通ずる路の阪が緣側から一ところ見えて、電信柱の並んで居る間を疎らに人が通つて行つた。風の薄ら寒い夕暮などには、灰色の空の天末を仕切つて、其處だけくつきりと晴れて居ることもあつた。

清は社を休んで、書齋の一隅に床を取つて、高窓から碧いさびしい空を仰向に見ながら、遠い遠い海岸のことなどを考へて居ることなどもあつた。

茶の間には、夕飯を食ふ頃、夕日がくわつと障子に射した。細君とさし向ひになると、いつも敏子の噂が出る。『敏子さんは何うも難かしいと思つて居た』こんなことを細君は言つて、『それにしても何うしてゐるんでせうねえ……一人で困つて居るでせうねえ。養女にするのも好いけれど、

先方がそれほど思つて居ないのに、此方から無理にすることもないでせうねえ。餘り此方で一生懸命にならない方が好う御座んすよ』長い間一緒に添つて居ても、矢張女には男の心が解らなかつた。

二三年來の絶えざる勞作――この疲勞も段々頭を擡げて來た。筆を執らうと思つても、何うしてもそれが手に附かなかつた。机の上の硯には塵が白く積つた。敏子の机にも座蒲團が載せてあるまゝになつて居た。『少し休まう』清はかう思つて約束した雜誌の寄稿を斷つた。

成たけソッとして置いても、敏子の噂は段々知れて行つた。役所に勤めて居る細君の兄は、『敏子さん、行つて了つたんですッてねえ、』かう言つて、清の顏を見た。

目白に通ふハイカラな細君の姪は、珍らしいことがあるものだといふやうな顏をして眼を丸くして居た。いつも何んでも無邪氣に言つて了まふといふやうな快活な娘だが、其の時ばかりは、默つて叔父さんや伯母さんの顏を見て居た。清の細君が話して聞かせると、『さうだッてねえ』と低い聲で言つて、まだ其年齢では解らない其事件を眞面目に考へて見るといふやうな顏をして居た。

『秀ちやんなどもしっかりしなくッちやいけないよ。本當に好いお手本ですよ』

細君がかう言ふと、

『私なんか大丈夫……』笑つて見せて、『伯母さん、ちきあゝなんだもの、厭になつて了ふわ……敏子さんだッて好いぢやありませんか、自分の好な人と一緒になつたんだもの……。私は舊弊は大嫌ひさ！』

二十七

○一月後には、清は田舎の寺に脚氣療養の人であつた。主僧は本堂の側の六畳を掃除して、其處に机だの火鉢だのを持つて來て呉れた。朝は高い篁に雀が喧しく囀つて、日影が晴やかに障子に射した。

○霧の深い朝もあつた。銀杏や杉などが微かに其梢を見せて居る間を、肺を病んだやうな蒼い顔をして、清は其處等をブラブラ歩いた。何年も掘いたことのない鐘樓の周圍には草が高く深く生茂つて、山門の白壁は處々崩れて居た。

たどつて行く路には、草の露が繁かつた。

庫裏の勝手の扉を明けると、其處から長い夜を待ち兼ねた矮鶏が三羽も四羽も羽をひろげて出て來た。朝炊の烟が細く颺つて、やがて寺の上さんが襷がけで桶を下げて井戸端に水汲みに出懸けて行くのが見える。井戸の周圍には水草が深く茂つて、水をザアと滴すと、餘沫が四邊に露の珠を綴つた。傍には朝鮮菊が白く鮮かに咲いて居た。

『いつもお早いですねえ』

清が其處等をぶらぶして居るのを見付けて、上さんは常に言葉を懸けた。

寺の娘が手拭を井戸側にかけて置いて釣瓶の竿を一生懸命にたぐり上げやうとして居る時には、清はいつもそれを手傳つて水を汲んでやつた。娘は金盥に明けた水でザブザ

ブと顔を洗つて、手拭の隅の方で擦るやうにして顔を拭いた。

やがて椀に餌を入れて來て、それを其處等に撒いて遣ると、矮鶏はあちこちからコヽと聲を立てゝ、立つて居る娘の周圍に集つてそれを啄いて食つた。

『まだ父さん、寢てる？』

『寢てるよ――』

娘は笑ひながら言つた。

主僧の起るのは遲かつた。一面に射し渡る朝日を眩しさうにして、手の掌に入れた鹽で齒を磨いた。

『君はいつも早いぢやないか』

『けれど、此頃の朝は好いからねえ。寢て居ては惜しい』

『僕はまた此頃は寢心が好くつて起きられない』

二人はこんな話を取交した。

清の居る本堂の六疊には、パンや牛乳を上さんが運んで來て呉れた。障子を明けると、夜もすがらガサガサとさびしい音を立てた裏山の草藪の中に、漆の木が一本眞紅に紅葉して居るのが見えた。蟲の音が微かに聞えた。

今年の秋は染々とさびしかつた。今まで經て來たライフがそれとなく頭に繰返された。今回の事件に對する自分の位置と、自分の執らなければならない正しい道といふやうなことも深く考へられた。

墓場を拔けて、桑の枯々になつた桑畠の傍を通つて、ひろい野に行く路があつた。野には林があつたり、村があつたり、白壁がところどころに見えたりした。電信柱の並んだレール路には、をりをり汽車が白い烟を立てゝ通つた。

夕日が秩父の山に靜かに落ちる頃、清は一人でよく其路を通つて野に行つた。夕暮の空氣の中にくつきりと出て居る其姿は、時にはレール路の上に長い間立つて居ることなどもあつた。

夕燒に其顏が明るく見えた。

『籍を君の家へ入れるといふことは、それは考へものだ』

主僧はある時かう言つて清の顏を見た。

清が默つて居るのですぐ言葉を續いて、

『それはよく考へなければいけない。君が當人同士の爲めに謀るのは好いが、家庭にはまた家庭といふことがある。こつちのことも念頭に置かなくつてはいけない』

『それは無論置いてるさ……けれど、僕は敏子の爲めに幸

福を計つてやらなければならない責任がある。……と言ふよりも、かう言つては變だが、今少し深い緣と言ふやうなものがあつて、敏子の不幸を放つて置くといふことが出來ないやうな心持になつてゐる。僕もいろいろ考へて見たサ。普通から言へば、これを境にして放つて置いても好いんだ。裏面は兎に角、表面は自分の戀を遂げる爲めに師を欺いた形になつて居るのだからねえ。僕に寄した手紙も一種の告別狀で、自分達は自分達で遣つて行くといふ調子も見えないことはないのだからねえ。僕は幾度かこのまゝ放つて了はうかと思つた。いや、時には師を師とも思はない其の態度に憤激したこともあつた。しかし、考へて見ると、憤激するだけそれだけ、放つて了ふことが出來ないんだねえ』

『さう物を深く難かしくして了ふのは、僕は不贊成だ』

笑ひながら主僧は言つた。

『これは昔からの僕の癖だけれどねえ』

かう言つた清の胸には此友にも打明けて言ふことの出來ない暗い心のあるのを感じない譯には行かなかつた。自分と敏子との關係、それが今一歩進めて居つたなら、こんなノンキなことを言つて居ない、また居られるものではない。三人の狀態が丸で變つて現はれたに相違ない……。

『放つて了ふことが出來ないんぢやない、自分が其巴渦の中から離れるのが厭なんだ……』清はいつも其處まで行つては突當つた。事件の起る度毎に、敏子の眉目が益々鮮かに印象されて來るのを清は感じた。

『これも僕が作品を公にした自然の報酬さ』

清は態と輕い調子で言つた。しかし心は重かつた。

『敏子さんは、それは實際氣の毒だよ。……しかし君の爲めにも敏子さんの爲めにも放つて置く方が好いよ。巴渦の中に入るのは愚だ』

『それは僕にも解つて居る！』と清は言つたが、『しかし、僕には此行先が何うなつて行くか解らん。巴渦の中に既に一歩を入れて居る人間には、よく其の巴渦の眞相は解りやう筈はないんだから……マア、然し、其の成行を見るサ』

主僧は默つて了つた。

二十八

秋は段々深くなつた。刈稻を載せた車が幾臺となく街道を通つて行つた。

清は田舍の寺に一月以上も居た。其間に社の用事があつて、一度東京に歸つたことがある。再び田舍に戻つて來た汽車の一夜は長く忘られなかつた。

晴れた月夜であつた。明るい光の充ちた廣い野を汽車は轟々として駛つた。白い畑が流るゝやうに野を掠め、畠を掠め、車室の兩側を掠めて落ちた。

東京から乘合せた客は粕壁あたりで皆な下りて了つて、廣い二等室の一隅に、清は一人インバネスの袖をかき合せて居た。窓硝子を隔てゝ見る野は丸で夢のやうであつた。月の明るい光を帶びた白い畑が、霧のやうに窓に當つては消え、當つては消えた。

清は自分から其身を憐まぬ譯には行かなかつた。常に押へて居た若い感情が漲るやうに溢れて來た。

『若い人は若い人として世の中に出て行く權利がある』

かう思つて、清は深く考へて見た。

『しかし、かうした運命になつたのは、誰の罪だらうか。妻あり子ある身で、若い敏子を愛したのは自分の罪だらうか。世の中に對して恥づべきことだらうか。

『罪？罪とは言ふ事は出來ない。遠い山の中の良家に育つ

た娘、それが何うした原因でか、ふと自分と言つたやうな男と相對した。それが――この運命の初めである。父親は『如何なる御緣にて父兄も及ばざる御世話に相成候かは存せず候へども』かう書いて來たことがあつた。如何なる緣！實際如何なる緣か、かの女と自分との間にかういふ複雜した運命が作られた。

『つまり自分に愛せられたのがかの女の災厄であつたのである。自分に愛されさへしなければ、二人の間の戀も或は其萌芽を現さずに終つたかも知れない。又、戀に落ちたからとて決してかうした難かしい形式に現はれて來なかつたかも知れない。

『身を隱さなければならないやうな、ハメに陷つたのは、自分が其間に立つて居たからだ。敏子を愛した自分――第三

者の資格のない自分が第三者として其間に立つて居るからだ。

『永久に、第三者で居なければならない憐むべき自己――

『それほど解つて居ながら、何故それに打勝つことが出來ないのか？何故、それを脫却することが出來ないのか？さう倫理學者は言ふに違ひない。又、犧牲といふことの價値を說くかも知れない。それは解つて居る。しかし、しかし……、

『長い歲月の下に、その感情が一つの空氣を釀して居たら何うしやう？その空氣が一朝一夕に稀薄にして了ふことが出來ないやうなものであつたら何うしやう？感情が感情を產み、運命が運命をつくつて行くのは、果して其當事者の罪だらうか。

『哀むべき敏子』かう思つた清の胸には悲哀が潮のやうに漲つて來た。

客車の扉を明けると、月の光と共に白い烟がぱつと四邊を掠めて流れた。

『哀むべき敏子』

清は暫し其處に立盡した。

二十九

馬橋の居る處が段々知れて來た。清が田舍から歸つて來る頃には、その下宿してゐる家を敎へて與れる人さへあつた。

敏子を何處かに隱して置いて、其身は平氣で其下宿に居るらしかつた。かれの交渉の間でもそれを知つて居るものは餘りないらしいといふことも解つた。

其下宿は牛込の山の手のある細い路を突當つた處にあつた。その二階の六疊の間に馬橋は居た。

いよ〳〵其問題を何うかしなければならない時が到着した。しかし清は今少し放つて置きたかつた。自然に開けて來る解決の時を待ちたかつた。かれは毎日例の花園の傍を通つて、郊外から都に出る電車の停留場に行つた。

細かい心理狀態は絶えず續いた。何處かに身を隱して居る敏子と、牛込の山の手の下宿に居る馬橋と、毎日社に出かけて行く清と、この三人の心が、其時々に由つて燃えたり消えたりするのが分明と解るやうにすら思はれた。『兎に角、自分はこの巴渦の中から脱するのは厭だ。このまゝ、放つて了ふやうな淡い心にはなれない。少くとも復仇をしてやらなければならない。兎に角、籍を入れやう、さうして置いて、その成行を見やう』清はこんなことを思つて、獨りで激昂することもあつた。

『ラバーがドウター、インロウになるのなどは面白い自然のアイロニイだ。ざまを見ろ！』

自分でかう罵つて冷かに笑つて見ることなどもあつた。

晩秋から初冬にかけて晴れた好い日が續いた。黄葉した銀杏の樹が些の雲の影もない碧の空に鮮かに聳えて見えた。路傍の林はガサガサと鳴つて、木の葉が風の一雲ごとにパラパラと散つた。途中の小川でいつも洗つてゐる百姓の大根は白かつた。

この晴れた日の一日であつた。清は社の高い三階の編輯室で一通の手紙を書いて居た。處々の高い窓からは、碧い晴れた空が都の瓦甍やら烟突やちを隔てゝ高く開けて居た。スコッチの背廣に地味なネクタイをした清の姿は多くの編輯員の中に交つて見られた。清は其手紙を二度も三度も書

き懸けては破つて捨てた。烈しい語氣が出たり、わざとらしい同情の言葉が出たり、心の中を裏切するやうな文句が出たりした。三度目には、「もう止さう、今少し放つて置かう」かう思つて卷紙を傍に置いて、心を落附ける爲めに卷烟草を一本吸つた。

しかしこのまゝ捨てゝ置けぬほどかれの心はつき詰めて居た。この手紙を書かうと思立つてから、もうかなりの日數になる。現に今日のやうに書きかけてやめたことも一度や二度ではない。敏子の所在を搜し出して、其の成行をかれは一刻も早く見たかつた。何んな醜い形をして居ても、かれは敏子に逢はずには居られないやうな氣がした。

かれは其手紙を長い間かゝつてヤッと書いた。それは十行位しかない手紙であつた。それには生れる兒の處分といふことを中心にして居た。清はそれを讀返して、封筒に入れて、牛込の下宿の番地を書いて、それから馬橋の名を書いた。

手紙を出した翌々日、少し用事があつて、清はお茶の水の停車場で甲武の電車を下りた。矢張心地よく晴れた日で、朝の光が寒い街頭に充ち渡つて居た。やゝ下り阪になつた舗石道の上を外濠の電車が滑かに駛つて行つた。

甲賀町の停留場の前には、新聞賣が新聞紙を電車の窓の前に差出して、高い賣聲を立てゝ居た。乘らうと思つて小走りに急いで來た電車がつい五六間の處で出て行つて了つたので、清は次の電車の來るのを待つべく餘儀なくされた。車掌が前の家に出たり入つたりするのを見ながら、清は久

しい間其處に立つて居た。

電車は容易に來なかつた。

停車場の時計は九時十五分のところを指して居た。初冬の中影が家屋の影やら庭樹の影やらを鮮かに地上に印して、大きな病院の門内からは、肥つた看護婦が二人、何か面白さうに話しながら出て行つた。

やがて電線が遠くから近くに鳴つて、一臺の電車は下り加減になつた道を日影に照されながら停留場へと近いて來た。中折帽だの、山高帽だの、丸髷だのが硝子窓の中にチラ〳〵見える。

二三人客の下りるのを待つて、清は乘つた。

明放した扉の入口に立つた時、清ははつと胸を躍した。

其處には馬橋が乘つて居た。

馬橋も同時に此方を見てはつとしたらしかつた。かれは茶色の中折帽を被つて、絣の羽織を着て、汚れた袴を穿いて、手に西洋の雜誌を持つて居た。

『ヤア』

と、それでも清は聲をかけた。

馬橋は立つて、帽子を取つて、挨拶を返した。

馬橋の隣の席が明いて居た。清は無意識に其處に腰を懸けた。馬橋も再び元の席に腰を下した。

二人とも眞面目な顏をして居た。

默つて居た。

先に口を開いたのは馬橋で、もう其時は電車は動き出して居た。『お手紙を難有う……』かう言つて、苦しさうに苦葉を途切らせて、『御返事を昨日出して置きましたが、御覽

になりましたか』

『いや、まだ見ません。社の方に出したんでせう？』

『え』

沈默が續いた。

明るい日影が硝子窓を透して車内に漲り渡つた。前に腰をかけて居る官吏らしい紳士が此方を見た。町の家並、軒にかゝげた大きな看板、ぞろぞろと通る人の群――それが早く早く眼の前を過ぎて行つた。

『實は――』やがてかう言ひかけた清は、烈しい心臟の鼓動を感じた。『實は、君のところが解らんから、今まで放つて置いたんだが、此間、ある人から君の居る處を聞いたもんだから、それで手紙を上げたんだがね……』聲を低くして、『此まゝ放つて置く譯には行かんからねえ、子供のこともあるからねえ。一度綴り相談をしなけりやならないと思ふんだがね』

心の底を裏切するほど清の聲は震へて居た。前の官吏はまたじろりと此方を見た。

『それに、小石川の兄さんも心配して居るからねえ』

かう清は續けて言つて、馬橋の手にして居る西洋の雜誌を見た。カーレント、リテラチユアといふ雜誌で、それには大陸文學の評論などが常によく載つて來た。

『此頃少し忙しいものですから……』馬橋は低頭いたまゝで、『差上げた手紙にも書いて置きましたが、いづれ其中詳しい御返事を申上げますから』

『今、何處かに出て居るんですか？』

清は心の動揺を蔽ふ爲めに、わざとかう碎けて出た。

『え、つまらん處ですけれど……』

『何處です？』

『旅行新聞といふつまらん新聞です。それに私が大部分遣つて居るものですから、忙くッて仕方がありません。朝は八時から夜は十時位まで遣ることもあるんです。』

『それは大變だ』

『何うせ長くは居ない積ですけれど……』

二人は暫く默つた。

『旅行新聞？』とやがて清は少し考へる眞似をして、『あんまり聞いたことがないが、そんな新聞があるんですか』

『つまらん新聞ですから』

『社は何處です？』

『ちき、この先の處になつて居ます』と丁度錦町の停留場を出たばかりの電車の窓から振返つて、其方角を指した。

また沈默が續いた。

電車は神經を刺戟するやうな鋭い音を立てゝ、錦町河岸に出るカーブを曲つて行つた。硝子窓からさし込む日影は向ふ側の丸髷の女の膝を照すやうになつた。漆を隔てた高い石垣の上には、山の中からつい近頃出て來たといふやうな新兵が五六人、並んだ姿を給のやうにはつきり見せて、頬りに喇叭の稽古をして居た。

膝を並べて沈默して居るのが二人にはいかにも辛さうであつた。馬橋が清の家によく行つた時分からは、もうかれこれ二年以上にもなる。其間にはいろいろなことがあつた。いろいろな感情が燃えたり消えたりした。馬橋の胸にはあ

る力の壓迫に對する一種の反抗といふものもあつた。

清は言つた。

『此間、小石川の兄さんに逢つた時も、何うせ、さういふ事になつたんなら仕方がないからッて、同情して居たですからねえ。何もそんなに隠したり何かするには當らない。君達も誤解して居ちやいかん。僕だつて、好意を持つて居ない譯ぢやないんだから』

馬橋は默つて聞いて居たが、急に、

『何うも、私には先生が解らなくつて困るんです。敵だか味方だか何うもよく解りません』

『さういふ風に考へるから困るよ、君達は——』

清は平氣な調子で言つたが、しかし烈しい衝動を感じない譯には行かなかつた。其言葉は確かに清の胸を深くついた。

馬橋はやがて立上つた。電車は既に神田橋に來て居た。

『それぢや、先生、此處で失禮します。四五日待つて下さい、確りした御返事はその時致しますから』かう挨拶してかれは電車を下りて行つた。

馬橋の言つたその一語を清は繰返して考へた。『へ、敵か味方か解らない？』かう冷笑もして見た。

また微笑まれるやうな氣もした。敵か味方か、實際其通りだ。敵になるか、味方になるか、それより他に出て行きやうのないのがかれと馬橋との間柄であつた。

『敵か、味方か』

其一語が鐵の棒のやうに冷かに清の胸に横つた。

三十

馬橋の返事は端書で、唯簡單に忙しいから四五日待つて呉れと書いてあつた。電車の中で過した十分間の光景は、深い印象を清の頭に殘したばかりではなかつた。馬橋の取つた態度から推して、かれ等の細かい心理も略々想像された。

何ういふ風に出て來るか、それを清は一種の期待と好奇心とを以て待つた。二三日は其間に經つて行つた。

思ひもかけず馬橋の親友の山田から最初に手紙が來た。

それにはかう書いてあつた。自分は此問題の中に入るのは好まないけれど、頼まれて據ないから、一度御都合の好い時に御目に懸り度いとしてあつた。清はそれを見て厭な氣がした。兎に角此方から出て行つた好意を酌み取ることの出來ない馬橋の態度に慊らなかつた。

しかし清は其の都合の好いヒを山田に報じて遣つた。

郊外の朝はもう霜が白かつた。硝子戸を透して明るい晴れた日の光線がさし込んで來た。其の八疊の座敷で、ある朝清は其山田といふ青年と相對して座つた。角火鉢には櫻炭が活々と起つて居た。

清の眼には、しつかりした、しかし何處かに優し味のある、額の廣い眼のはつきりした一人の青年が映つた。縞の羽織と角帶とが何となくその人を商人風に見せた。

話振も落附いて居た。

主人の大きな體と太い聲とは、客の痩削な體と小さい聲と面白い對照をなして見られた。

其處に茶を運んで出て來た細君は、遊感のない打解けた調子で、

『敏子さん、御丈夫なんでせう？』

『え』

かう言つた客の顏には少しく狼狽した樣子が見えた。敏子の所在を客はまだ打明けなかつた。清も成たけそれを此方から聞くまいとして居た。

細君が茶をついで引込んでから、『私は、さうしたいと思ふんですが、當人は何んな考だか、それを聞いて見なければ駄目ですけれど……』かう清は前の言葉を續いで、『國では非常に怒つて居るですから、とても手をつけることは出來ない。それに、田舍の名譽とか虛榮とか言ふこともある。だから、何うしても籍は私に寄すと言ふんです。父親は馬橋にやる爲めに籍を送るんなら恨みだと言ひますけれど、そんなことを今になつては言つて居られないし、それは小石川の兄も承知して居ることですから、當人達さへそれで好いなら、私はさうしたいと思ふんです。しかし、私ばかり好意を持つて居ても、當人達にそれが解らなくつては甲斐がないですけれど……』

『いゝえ、そんなことはありません。馬橋君は一人で誤解して、いろいろに考へる質なものですから……先生がさう仰有つて下さるなどゝは夢にも想像して居らなかつたんです』かう言つて山田は清の顏を見た。

『先生のお話を當人に解るやうによく言つて聞かせませう。本當にそんな風に考へては居なかつたんですから。敏子さん身を隱す時にも、何んなにしても、國では屹度探し出して連れて歸るに違ひないッて言つて居りました位でしたから』山田はかうつゞけて言つて、『ですから友人でも誰も知つて居るものはありません。私と馬橋君と三人きり知つて居ないんですから』

『それで一體何うしてるんです？』

『上總の海岸に行つて居ります』

『上總の海岸？』

かう清は問ひ返すやうな調子で言つた。

すぐ言葉を返して、

『一人でゞすか』

『え』

山田は靜かに答へた。

『上總の海岸は何處です？』

『一の宮の近所で、九十九里の濱の、何んとか言ひました。何でもひどひ田舍ださうです』

『九十九里？　それでは敏子が父さんに連れられて田舍に歸つて行つた年の夏に、馬橋が行つてた處ですね？』

『え、さうです』

それは停車場から三四里も海岸に近寄つた處であつた。其處には砂山があつたり松林があつたりした。砂山の間には海に注ぐ小川が絕えたりして、蘆や蒲の新い芽などが茂つた。失戀の苦痛を醫す爲に新綠の頃を二月ほど行つて居た馬橋は、其時その世を懸け離れた海岸の話を詳

く清にして聞かせた。馬橋はある漁師の家の二階を借りて住んで居た。其家の女房は四十女で極端な田舎者だが、よく世話をして呉れたといふ。また其處は漁村に見るやうな淫靡な地で、白粉を塗つた女の居る小料理屋が、其處にも此處にもあつて、大漁の時などはそれは賑かであるといふ。

『他に見られないやうなカラーがありますよ。先生などお出になると、屹度變つたものが出來るに違ひないですが……』こんなことをも馬橋は言つた。清は其時この失戀の一青年が、夕暮ごとに松のある砂山の間から遠い海のかゝやきを見たり、微かな波の音を聞いたりするのを想像して深い同情を寄せた。馬橋は其處から小さい瓶に入れた鰹の鹽辛を土産に持て來て呉れた。

其二階に敏子は身を隠したのである。

『小石川からすぐ其處に行つたんですか？』

成るたけ此方からは聞くまいと思ひながらも、清はかう訊かぬ譯には行かなかつた。

『荷物は先に送つて置きましたけれど、あれから二三日は牛込の馬橋の下宿に居たやうでした』

『今の下宿ですか』

『え』

『それちや前からその下宿に出入して居たんですね』

『えゝ』

山田の顏には微笑が見られた。

『初めは一緒に行つたんでせう？』

『え、一月ほど二人して一緒に其處に行つて居ました。……

けどもそれでは仕事が出來ませんから、敏さんを置いて、一先づ馬橋君は此方に出て來たのです』

『何時です、出て來たのは？』

『先月の初め頃でした』

『それで一體馬橋君は何う考へて居たんでせう。隠し了せる積りだつたんでせうか？』

『さうでも御座いますまいけれど、何うするッていふ考も出なかつたんでせう。先生や小石川の兄さんがさういふ考をお持ちだとは少も知りませんでしたから』

『何うも馬橋君の遣り方が僕には呑込めないかう首ひかけた清の聲は眞面目であつた。

『あの初めの時だッて、隠さなくつても好いことを隠して好意で圓滿に成功することを打ち壞して了つたやうなところがある。今度だッて、丸でヤリ方が破壞的なんだからねえ。……何もさうまでしないたッて好いと思ふんですがねえ』

『何うもさういふ處があつて、いつでも誤解されて困るのです。感情一方で、平生神經をつかふ方ですから』不圖思ひ附いたやうに、『私も一度はいつそ二人の間を打壞して了はうかと思つたことがあつたんです。打壞して了つた方が馬橋君にも敏さんにも幸福だと思つたことがありました』

かう言つて、山田は思ひ返すやうな風をして、『さうでした。あれは八月頃でしたが、二人の間が鳥渡變になつて、敏さんが馬橋君を避けるといふ風な時がありました。三人で近郊などを散歩しても、敏さんは始中終物思はしいといふ風をして居て、いつものやうに元氣がないんです。馬橋

君が何か慰めるやうなことを言ふと、「そんな芝居の臺辭見たやうな紋切形は厭よ」なんて言ふんです。其時分、先生が敏さんを養女にして、純然たる文學者にさせるといふ話と聞いて知つてゐたもんですから、これは的切、戀がさめて了つたんだと思つて、馬橋君も非常に絶望して泣いたり何かして居ました。私もいつそ破壞して了つた方が好いと思つたんです。處が其時もう懷姙して居たので、敏さんはそれを馬橋君に打明けやうか打明けまいかと長い間煩悶して居たのだといふことが後で解りました」

九州の旅から歸て來た頃の敏子の蒼い顏を清は思ひ出した。

『兎に角敏さんは姙娠といふことに就いて非常に煩悶したやうでした。一時はこれを誰にも言はないで、自分で自殺

して處分しやうなどゝ考へたこともあつたらしかつたです。それから先生に打明けて馬橋君との戀の關係を全く絶たうと思つたこともあつたらしい。……けれど矢張女ですから結局馬橋君に打明けるといふことになつたんです……私もそれを聞いた時は喫驚しました』

『ははア、さうですか』

かう言つた清はある新しい意味を二人の戀の中に發見したやうな氣がした。女が陷つて行く自然の徑路も染々考へられた。

『ははア成程、さうですかな』

再び繰返して言つた清の聲は低かつた。田邊の前の細君が懷姙したことを知らせずに身を隱したことなどが思ひ出された。

『それを打明けてから、二人は前より一層離れられなくなつたのです。二人はそれから身をかくす處分に取懸つたのでした。……』

青春の過ぎ行く悲哀といふやうなものが明るいスウイトな味ひを靜かな朝の一間に漂らせた。敏子の若い時を知つて居るだけそれだけ、清にはその戀の成行が鮮かに眼に映つた。

白いリボンを懸けて、明るい顏をして居た頃がなつかしかつた。二疊の狹い一間に机を置いて、一輪挿に匂ひの高い沈丁花を活けて、艶な白い顏を薄暗い夕暮の空氣の中に見せて、綺麗な細かい字を原稿紙の上に走らせて居る時分には、かうした運命が其前に待つて居やうとは清にも敏子にも思はれなかつた。花やかな希望、生々した將來、樂し

さうな笑聲――其處にはまだ美しい理想の夢が覺まされずに殘されてあつた。永久に新しい樂しい春であつた。

『先生――』

かう言つては書齋に入つて來て、藝術に關する清の話に聞き惚れるのがいつもの習ひであつた。親の言ふことは聞かなくとも、清の言葉には眞理でもあるかのやうに常に素直に耳を傾けて聞いた。其頃の無邪氣な態度や、理想と希望にかゞやいた表情ある眼や、藝術にやさしい身を縋らせやうとした健氣な心や、さうしたさまざまの印象はまだはつきりと清の眼や心に殘つて居た。

田邊や、西さんや、それから清自身や、其時分の青年が泣いたり苦んだりした戀がいつの間にか過ぎ去つて了つたやうに、矢張敏子や馬橋の戀も過ぎて行つて了ふのだ。永

久に新しいと思ひ、樂しいと思つた春は時の間にかうして過ぎて行つて了ふのだ。かう思つた時の清は、電車の中で馬橋と膝を並べて居た時の清とは丸で別の人であつた。

『若い人の爲め――敏子の爲め』

かう思つた清の眼の前には、何うした聯想か、自分の若い頃に逢つたり話したりした女の人々が歴々と見えて通つた。藤棚のある橋の袂の家に居た紫の帶をしめた女、友人の家で歌牌などでよく落合つた頬の肉附の好い色の白い女、旅の小川の畔でなでしこを取つて髪に挿して行つた女、海水浴場で懇意になつた眼の綺麗な早口な女――清は昔がこひしかつた。

『矢張ラヴの出來る人と出來ない人とがあるやうですねえ』

氣が附くと、山田はこんなことを言つて居た。

『前にも一度敏さんはそんなことがあつたんです……』かう續けて言つて、『御存じかも知れませんけれど、まだ女學院に居る時分』言ひかけて清の顏を見て、

『御存じですか』

『え、聞いたことがあります。其人は今、新聞記者をしてゐるッて言ふぢやありませんか』

『え』

山田は笑つて見せた。

『けれど、別に何うの彼うのと言ふのぢやなかつたんでせう?』

『え、まだ其の頃は無邪氣でしたから、そんなこともなかつたんでせう。けれど學校では大分問題になつたんです。その爲め其の教師は辭職するやうなことになつたんですか

ら』

『さうですつてねえ』

清の頭には此時ふとこの山田といふ青年と馬橋と敏子との關係が考へられた。親友のラヴの中に居て、三人で一緒に郊外に散歩に出かけたり、二人の戀の爲めにかうまで、力を盡したりする男！清はかう思つて、更に新しい感を抱いて、その山田の廣い額とはつきりした眼とを見た。

明るい日影のさし透つた一間は靜かであつた。

三十一

清の勤める社の三階の應接間に小石川の兄が訪ねて來たり、山田が一二度手紙を郊外の家に寄したりして、話は段段圓滿な解決を告げるやうになつて來た。『しかし敏子が何と言ふかわからない。貧乏な文學者の養女になるのは厭だと言ふかも知れない。それに馬橋との結婚に就いても異議があるかも知れない。兎に角當人の意見を聞いて見なければ駄目だ』清はかういふ意見を敏子の兄に話した。

『そんなことはないでせう。將來文學を以て世に立たうと

する二人に取つては、貴方に親になつて貰ふと言ふことは、願つても出來ないことでせう。』兄はこんなことを言つて笑つた。巴渦の外に居る兄には、細かい心理狀態が解らう筈はなかつた。

山田と一緒に馬橋が清の家を訪ねて來たのは、矢張霜の白い晴れた朝であつた。社にお出にならない中にと言つて、二人はかなり早く遣つて來た。

八疊の座敷で三人は快活に話した。複雜した事件が、事件の中に居る個人と個人との心持でズンズン展開して行く快よさを誰も感じた。

『誤解して居たものですから』

馬橋は申譯をするやうに言つた。

『それで、一體生れるのは何時です？』

かう清が訊いた。

馬橋は山田と顏を見合せて、笑つて見せて、

『何時ッて？よくは知りませんけれど……來年の一月か二月でせうと思ふんですが』

『それぢやまだ汽車に乘つて歸つて來ても大丈夫ですね』

『え、大丈夫でせうとも』

『それで、君は何うする積です？』清は言葉の調子を改めて、『彼方で產をさせる積りですか、それとも此方につれて來るつもりですか』

『何方にしたら好いでせうか』

馬橋は清の顏を見て、次に山田の方を顧みた。

『上さんがよく世話をして呉れますから彼方でさせるのも好いとも思ひますけれど……』かう言つてまた清の方を見

た。

心の底を讀まうとするやうな眼の細かい働きを清は感じた。

『何方が好いでせう、山田君』

清はわざとかう訊いて見た。

『さア』

と山田は少し考へて、『それは……來られるのなら、東京の方が好いでせう。初めてですから、遠い處では、何かにつけて力になるものがなくッて淋しいでせうし、それに、東京なら、もしもの時に醫師もありますし……』

『僕もさう思ふ』

清は贊成した。

『何うせ、君だッて、家を一つ持たなくつちやならないん

だから』山田は馬橋に言つた。

『さうする方が好いねえ、君。先生も、小石川の兄さんもさう言つて下さるんだし、君も來月から『報知』に入るやうになつて居るんだから、さうする方が好い』

『さうしやう……』

馬橋も點頭いて見せた。

そんな話をして居る間に、婢は麥酒を盆に載せて持つて來た。

コップを引くり返して勸めながら、

『君は飲むんでせう？』

かう清が言ふと、

『一時は少し飲みましたけれど、此頃はやめて居ります』

『まア、好いさ、一杯やり給へ』

かう言つて波々と注いで、今一つのに注がうとすると、山田は手で蓋をして、『私は駄目です』

『まア好いでせう、冬はビールは駄目だけれど』

『本當に戴かないんですから』山田はかう云つたが、しかし清の強ひて注ぐのを留めもしかつた。

硝子戸からさし込んで來る朝の日影は人々の手にした麥酒のコップに明るく照つた。霜に濡れた八ッ手は冬枯の庭に際立つて綠濃く見られた。

『馬橋君はかなり飲んだんでせう。』

『え、一時はやりました。』失戀を醫す爲めといふ意味が其處に籠られてあつた。『一時は酒がなくつては生きて居られないといふ位でした。それから道樂もやりました』こんなことを言つて、『けれど吾々は貧乏ですから駄目です。』

『それで今はやめたんですか。』

『やめたと言ふこともないですけども、自然にやめさせられたんですな……』コップを取つて半分ほど飲んで、『何うも酒ッて言ふものは不思議ですな、飲まないで居れば飲めなくなる。』

清は馬橋が下に置いたコップに一杯に注ぎ足すと、

『そんなに飲むと醉つて了ひます。これから社に行かなくつちやなりませんから……。それに『報知』の編輯長にも今日來いと言はれて居ますから。』

『まア、好いさ！』

かう言つて酒を勧める清は、何處となく愉快さうに見えた。

『外に出て寒い空氣に當ると、すぐ醒めて了ふよ。』

こんなことも言つた。

やがて馬橋の顔も主人の顔も赤くなつて、來た。段々いろいろな話が出る。文壇がこれから何うなつて行くだらうとか、自然主義の本旨は何處にあるだらうとか、大陸では今何ういふ作者が何ういふ思潮を湧かせて居るだらうとか、さういふことが盡きずに二人の話頭に上つた。出版業に手を出しかけて居る山田とは違つて、馬橋は作者と批評家とを兼ねたやうな話を得意にした。其の友達には近頃新聞雜誌に時々大陸文學の紹介の筆を執る人があつたり、新派の歌で頭角を現はし始めた青年があつたりした。早稻田を出た新進作家もあつた。

『幸ひに、友達が皆な熱心ですから、一緒に遣るのに張合ひがあつて好いです。』かうしたことも言つた。

二人を材にした清の作品に就いては、

『あれを讀んだ時は、實際痛かつたですよ。さうです、あれは放浪して群馬に居た時、友達から君のことを書いたに違ひないッて送つて寄して呉れました。しかし痛かつたのもほんの一時でした。』

賑かな笑聲が一間に充ちた。

其處に出て來た細君は、

『馬橋さん、お久し振でしたねえ』

莞爾と笑ひながら言つた。

馬橋はそれでもきまりが惡いやうに、鳥渡居住ひを正して挨拶を返した。

敏子の書いたものに對する批評が出たのは、もう二人が暇を告げやうとする頃であつた。何うも感情が出て主觀に

陷り易くつて不可ない。かうした話も出た。

『何うも一體性質がさういふ風なんですな』とも言つた。

清は、『しかし折角遊び始めたんだから、捨てずに遊らせるやうにして呉れ給へ。』かう言つて馬橋の方を見た。敏子のことが脈々とした哀愁をまた清の胸に齎らして來た。

三十二

其年も押詰つて町の軒並に正月の飾竹がガサガサと音を立てる頃、迎へに行つた馬橋と一緒に敏子が田舍から歸つて來るといふ報を清は耳にした。新しく馬橋の借りた家は牛込の原町の奥で、牛肉屋だの、八百屋だの、夜は電燈の輝く唐物店だのの連つた通の湯屋の角から左に入つた處にあつた。二疊に六疊に三疊の三間、家賃は六圓五十錢、六疊の間に下宿の二階から運んで來た机やら箱やらを並べて置いて、三疊の押入れに行李や夜具や汚れた衣類などを

入れた。

經濟の點から、今一つは馬橋は留守勝で萬事不自由といふ點から、山田が暫く一緒に同居することになつて、これも矢張俥一臺位しかない荷物を今まで居た下宿から運んで來た。

生活に必要な勝手道具は、高くも安くも取揃へられるやうに出來て居た。手桶の代りにバケツ、竈の代りに七輪、釜も陶器の赤い素燒の安いのを買へばそれで結構飯が炊けた。馬橋が田舍に敏子を迎へに行つて居る間、山田は水を汲んだり勝手元をしたりして自炊をした。「下宿屋に居るよりも、餘程暢氣で好う御座んす。食ひたい時は食ふし、寢たい時は寢るし、隣の室が喧しいなどといふこともないし、此頃の暖かい午前に、縁側に寢ころんで日向ぼつこりをして居ると、實に好い心地です。」山田はこんな暢氣なことを言つて居た。

敏子が歸つて來たといふ報知のあつた翌日であつた。國元から送籍の手續をした書類が廻して寄された。敏子と清とが調印してそれを役場に出しさへすれば好いやうになつて居た。これで安心したといふ調子が、父親の手紙に歴々と見えて居た。歴代保つて來た名譽、町でも名高い家の系統、さうしたものが汚されず辱しめられずに濟んだのを喜ぶらしい文句が其處にも此處にもあつた。それから馬橋に籍を入れることに就いての不同意も繰返して書いてあつた。田舍に住んで居る人と都會に住んで居る人との心持の相違はそれにも解つた。

清は細君に實印を出させた。それは箪笥の底の衣類の下

に滅つてあつた。祖父が腰に下げて歩いたといふ小さい革袋は手擦がして、象牙の根付はカタカタと音を立てた。其處には一度彫られて磨り消された父親の印材も入られてあつた。清は實印などを滅多に用ゐることがなかつた。かれは祖父の名告を篆書にした古風な印を其まゝ自分の實印として屆けて置いた。

敏子を籍に入れることに就いては親戚は總べて不服であつた。――しかし清はそれを別に意にしなかつた。

かれは書類を手に取つた。

……今回養女に貰ひ受け候間……

その一句にかれの心は引きよせられた。かれは不思議な緣を振返つて考へぬ譯には行かなかつた。かれは今一度其書類を翻して見て、さて實印を捺した。

『これで敏子さんさへ好ければそれで好いんだが、當人もいざとなると考へがあるかも知れない。丁度好い、お前、見舞がてら一つ今日歸りに寄つて、これを見せて、敏子さん自身の考へも聞いて來る方が好い』

細君は丁度お三輪や姉の未亡人の家に御歳暮に行く準備をして居た。其處から原町は近かつた。

聞いて來た番地は三軒しかなかつた。大きな門のある家、その隣の二軒つゞきの長屋、其一軒が確かにそれらしく思はれた。しかし表札も名札もなかつた。格子戸は内から鍵がかけてあつた。

上り端に、女の駒下駄が一足置かれてあつた。色の褪めた褞珍の鼻緒には見覺えがなかつた。細君は今一度格子戸

をガタガタさせて、『御免なさい』と二三度おとづれて見た。返事はなかつた。

『留守かしらん』細君はかう口に出して言つて見たが、何うも不在らしく思はれなかつた。大きな腹をして、世を忍ぶ身で、田舎から歸つて來る匆々、家を空けて出かけて歩くとも思はれない。細君はふと家と家との間に細い小路のあるのを見付けて、溝板を蹈んで裏へ廻つて見た。其處には井戸があつて、隣の物干棹に襁褓だの子供の衣物などのかけ連ねられてあるのが見えた。紅白の絞の山茶花が見事に奥の家の塀の上に見えて居た。霜解の道に薄い日影がさした。

乘つて來た車夫は、細君が霜解に惱んで居るのを見て、其處に遺つて來て、ヅカヅカと裏口に廻つて、大和隆子の

破れやら戸の隙間などから内の樣子を窺つて見て呉れた。やがて戻つて來て、『何うも御留守のやうです。……新しく引越して居らつしやつた方には逢ひないやうですけれど、何方も御留守のやうです』

細君は表へ出て、格子戸の前に立つて今一度案内を乞うて見た。しかし矢張返事がないので、思ひ切つて、車に乘つて姉の未亡人の家に行つた。

姉は相變らず莞爾して居た。歳の暮で裁縫が忙しく、片時も針の手を留める暇はなかつた。『お前、お氣の毒だけれど、其處の茶箪笥の上の處に、昨日貰つたカステラがあるよ。それからお茶も淹れて飲んでお呉れよ。お客樣を使つて濟まないけれど……』かう言つて姉は笑つて、『お前なぞは暢氣で好いねえ。……歳の暮が來ても忙しいなんて言ふ

ことはありはしまい。私などはこれから大晦日の夜の十二時まではぶつつり坐つたッきりだからねえ。』

『却つて、張合があつて好いのよ、姉さんのやうに忙しい方が……』

氣の置けない姉妹はこんなことを言つて茶を飲んだ。

敏子の話をすると、

『何うしたんだらうねえ、本當に。家が違つたんぢやないかねえ。』

『さうかも知れないけれど……まさかさうでもないだらうと思ふの。乾度、一寸其處等に買物にでも行つた留守だッたかも知れない。歸りに今一度寄つて見やうと思ふの……』

『さうかも知れないよ。あの人はよく買物に出るから……それでもまア、お前の家でさうしてやれば、敏子さんも幸

福さ。』

『それは本當にさうよ。本當は家では樽はないッて言つても仕方がないんだから。』

隣のお三輪も暢氣なことを言つて居た。其話を聞いて、

『敏子さんも、面白い幕を打ちなさつたもんぢやね』こんなことを言つて笑つた。

友達の處から丁度歸つて來た秀子は、『さう、敏子さん歸つて來たの？其處にゐるの？』眼を丸くして言つた。

細君は歸りに今一度敏子の家に寄つて見ることにした。

矢張表の格子戸の鍵はかゝつて居た。刷下駄も其儘になつて居た。先刻と違つたやうな氣勢は何處にも見出されなかつた。

細君は思切つて、裏の大和障子を明けて家の内に入つて見た。勝手には七輪と赤い素燒の釜とが置いてあつて、バケツには水が半分ほど汲まれてある。其處に出してある御膳は、まだ洗はずにだらしなく散ばしてあつた。

處々破れた中じきりの障子を明けて、細君は其處から六疊の座敷に入つて行つた。矢張誰も居なかつた。西洋の書籍やら雜誌やらのギッシリ詰つた書箱の傍に机が置かれて、其上に原稿紙が二三枚載せてあつて、棧の古くなつた障子の硝子から更紗の色の褪めた座蒲團の上に日影が線をなして射し込んで居た。緣側の隅にある手水鉢の傍では、南天燭の赤い實を小鳥が頻りに啄いて居たが、障子を明けると、輕い羽音を立てゝ慌てゝ飛んで行つた。

玄關の二疊はその六疊に續いて居た。其處からは表の通

りに待つてゐる車が見えた。

『本當に留守なのか知らん……不用心な……若い人は暢氣だねえ……』こんなことを思つて、後を振返つた細君は、其處に勝手と並んで、別に一間宝のあるのを發見した。座敷との間を障子で仕切つてあつた。

其處は暗かつた。

其の障子を明けて見やうと思つた細君は、俄かにある不安の押寄せて來るのを感じた。案内を乞うても乞うても返事がなかつた。もしや……と思つた胸は無氣味でもあり怖しくもあつた。

それでも細君はその障子を靜かに明けて見た。明るい處から暗い處に入つた眼は、其處にある何物をも明しはつきりと見ることが出來なかつた。何だか黑い大きいものが

眼に附いたと思つたが、それが蒲團で、夜着を殆ど冠るやうにして、庇髪の處だけを出して、敏子が寢て居るのであるといふことは急には解らなかつた。

細君は暫くぢつとして立つて居た。死んで居るのではないかと思つてゾッとした。

『敏子さん、敏子さん』

暫くしてから、細君は其傍に坐つて、蒲團の上から揺り起した。

『ア、ア』

と言つたと思ふと、敏子は眼をぱッちり明いて、恐ろしい幻覺でも見たやうな顔をして四邊を見廻した。

『私ですよ、敏子さん』

細君がかう言つて顔を出すと、敏子は吃驚したやうに、

俄かに夜着をはね退けて、其まゝ蒲團の上に起き返つた。蒼ざめた顔に解け縺つた髪が亂れて、ごろ寢をした銘仙の羽織は皺だらけになつて居た。帶は緊めて居なかつた。

『何うかしたの？敏子さん。』

敏子は默つて打伏になつた。急には顔も擧げなかつた。

『本當に何うかなすつたの？』

『いゝえ』

敏子は辛うじてかう言つた。いつもなら、『奥さん、まア』とか、『まア、何うして奥さん』とか言ふのであるが、今日はさうした言葉も出なかつた。怖しい夢から覺めた人のやうに唯惘然として居た。

急に、

『奥さん、まア、彼方に入らして居て下さい。こんな處で

は御挨拶も出來ませんから。』

敏子がかう言ふので、細君は座敷の方に來て坐つた。

帶を締めたり何かするやうな氣勢が暫く聞えて居たが、やがて其處に出て來た敏子の顏は元氣がなかつた。

細君と敏子との間に交されるいつものやうな快活な調子には何うしてもなれなかつた。細君も眞面目な顏をして居た。敏子は唯低頭いて居た。

逢つたら、すぐ打解けて、人を心配させた恨みをも言つて遣らう、身を隱して居た間の一伍一什をも聞いて遣らう、逢に就いての相談對手にもなつて遣らう。かういろいろに思つて細君は遣つて來た。しかしさうした氣分にはなれなかつた。

『何んなに心配したか知れませんでしたよ。田舍の母樣なども、それは御心配でしたよ。』

かう言つた細君の言葉にも何處か打解けないところがあつた。

『何からお話して、お詫をして好いんですか、先生にも大變に御迷惑をかけて——』

敏子はそれでも小聲でかう言つて細君の方を見た。すぐ低頭いた顏には、肉の頭へが見えた。

見馴れた不斷着の銘仙の着物に、メリンスの色の褪めた帶を緊めて居た。いつもはめてゐた純金の指環はもうなかつた。

七月の腹は著るしく眼に立つた。皮膚の色もいやに黃ばんで見えた。眼の周圍にも暗い紫の影が出來た。

二人とも胸にあることを充分に言へないといふ風であつ

た。一座はやゝともすると沈默に落ちた。

敏子は視線を膝の邊に落して、白い額と捩せた頰とを此方に見せて、絶えず物思はしげな態度をして居た。

『本當に、何うもなすッたんぢやないんでせう？』

『えゝ』

『一時間ばかり前にもお訪ねしたんですけれど、矢張鍵がかゝつて居て――』細君は其話を始めて見たが、敏子にはその相手になる餘裕がなかつた。

『曉方、少し御腹が痛んだもんですから』

かう言つたきりで、話がいつものやうに續かなかつた。

細君はやがて風呂敷包の中から、其處で買つて來た菓子折を出した。

『ほんの御見舞のしるしよ』

『奥さん、こんな御心配は……本當に御世話にばかりなつて』

敏子の聲は曇つて聞えた。下唇を噛みしめて、胸に集つて來る感情を押へるといふやうな風が歴々と見えた。

『それから、あの……』と細君は風呂敷の奥に包んで來た書類を其處に出して、

『お國から籍の屆が來たんですの……。それで宅でね、よく敏子さんの心持も聞いて來いッて、そして敏子さんが好いなら、判を捺して貰つて來いッて吩咐けられて來たんですの。』

敏子は書類を手に取つたが、それを翻して見るでもなかつた。其儘傍に置いて、

『奥さん、私、今、判がないのよ……。』

かう言つて細君の方を見て、

『あとで判を捺して、すぐ郵便で送るやうにしますから』

と言葉を續けた。

『え、え、今ぢやなくつたッて好いんですよ。一生のことですから、貴女もよく考へて見てから』

細君はわざと氣輕に笑つて見せた。

『本當に御世話にばかりなつて……』

少時してから、やゝ氣が落附いたといふ風で敏子は言つた。

しかし打解けた話はつひに出來なかつた。かうした處を訪ねられたことは若い身に取つて餘りに突然でもあり、氣恥しくもあり、胸苦しくもあつた。敏子の心臟の鼓動は容易に靜まらなかつた。

『それぢや又伺ひますから。』

細君はやがて暇を告げた。

『さう、奥さん……もう歸るの？本當にかうして御目にかからうとは思ひませんでしたのねえ。……何にも……お茶も上げることも出來ないで……』かう言つて立つて來た敏子の聲には、もう堪らなくなつたといふやうな調子が籠つた。眼には涙が見えた。

『本當に、餘り心配しない方が好う御座んすよ。……お腹に觸るといけないから。』かう言つた細君の胸には女の同情が漲るやうに起つて來た。

『本當に心配しない方が好くつてよ。』

細君は敏子の蒼いやつれた顏をじつと見て、かう繰返して言つた。

『奥さん！』

かう言つた敏子は、俄かにほろほろと涙を滴した。『奥さん！』急にエクスタシイに陥つたといふやうに、いきなり細君の手を執つて、堅く握りしめて、

『奥さん、先生によろしくね！』

涙に潤つた敏子の眼には、烈しい一種の表情が見えた。

細君が暇を告げて車に乗る間、敏子は格子戸の處に立つて、其の蒼白い顔を此方に見せて居た。午近い靜かな通りには、下駄の歯入が鼓を叩いて通つたり、豆腐屋が鈴を鳴して觸聲を立てゝ行つたりした。

車夫が梶棒を上げた時、『左様なら……それでは御大事にね』と細君は聲をかけた。敏子は挨拶を返した。

女の經驗する妊娠の時の心の狀態などを、細君は車の上

で考へて居た。

其日の夕暮、清が社から歸つて來るのを待受けて、細君は敏子に逢つた一伍一什を詳しく話して聞かせた。

『もう、餘程目に立つやうになりました。』

歸り際に、急に手を握つた話もして聞せて、

『本當に、敏子さん、感情の強い人ねえ……。かう私の手を堅く握つて、涙をぽろぽろこぼすんですもの……。私も氣の毒になつて了ひました。本當に不思議な緣ねえ。』

清は默つて聞いて居た。

三十三

清はさびしく暮した。

霜解の道を拾ひながら、日毎に社に通つて行つた。日影に彩られて霧が美しく見える朝もあつた。丘から丘に通ふ路には西風が寒く吹いた。

『當人も是非先生に御目にかゝりて御禮申し上ねばならぬには候へども、感情の昂り居候際とてこれは今少時御ゆるし下されたく幾重にも御察しのほど願上候』

山田から來た手紙にはこんなことが書いてあつた。

『あゝいふ體で貴方に逢ふのが厭なんですよ、吃度』

かう細君はその手紙を見て言つた。

敏子はまだ體を產婆に見せて居らなかつた。餘り臨月に近いてからでは、產婆は萬一を氣遣つて、成たけ責任を逃れたがるものであつた。中にはさうした產婦を謝絕するものも尠なくなかつた。

『本當に若い人達は暢氣ですねえ!』

それを聞いた細君はかう言つて笑つた。

牛込に居る頃、細君のたのみつけて居た產婆があつた。總領の娘も、次の男の兒も皆なその人の世話になつた。『あのお婆さんは何うでせう』と細君は言つた。しかしそれよりも簡單に話の出來る產婆が其の近所に居た。それはお三輪の稚友達で、長い間苦勞した夫と別れて、つひ此頃この

近くに産婆の札を掲げた。お三輪がある日其處を通ると、豫ねて知つて居る其女の名が書いてあつて、丁度其處から出かけて來た人は、十五六年も逢はない昔の友達であつた。

『マア、貴方お桂さんぢやなくッて？』『まア、貴方お三輪さん？』それから其産婆はお三輪の家に出入するやうになつた。

『あの人に頼んで下さいよ。新店だから御禮なんぞはいくらだつて構ひやしないんぢやがね。』

清が年始に出かけて行つた時、お三輪はかう言つて、その産婆を勧めた。

籍は細君の行つた翌日、山田が持つて來て、早速役場の届けをすました。『いゝ大きな娘さんが出來たんぢやッてねえ……。まア、御目出度いことぢやね』お三輪はこんな風

に清に言つた。

其夜は月が薄い暈を被て居た。お三輪の家と姉の未亡人の家で飲ませられた酒に清はかなり酔つて居た。かれは要垣と柴垣との間の細い巷路を歩いて行つた。其處にある二階屋は、かれの三番目の男の兒の生れたところで、敏子が父親に連れられて始めて遣つて來たのも其家であつた。其家の玄關の窓からは灯が明るく見えて居た。

推移といふことは、其前の桐畠や菜畑が大きな二階建の下宿屋になつたのでも知れた。其頃は深い樹の影の中に、清の家の軒燈がほつゝり一つ點いて居るばかりで、夜は女などの出て歩けないほど暗くさびしかつた。それが今では其處にも此處にも笑聲がして、下宿屋の室からは琵琶歌などが洩れて聞えた。

敏子の家は其處から遠くはなかつた。元、藪地であつた處に新道が出來て、寺の傍から眞直に原町の通りに出るやうになつて居る。清は餘所ながら其家を見て行く氣になつて、其方に出て行つた。

近頃にないやうな暖かい夜であつた。歩いて行く清の影が薄く地上に落ちて居た。正月の夜は何處の家も賑かで、笑聲が其處にも此處にもした。歌牌を讀む若い女の聲のする家もあつた。

電燈の明るい湯屋からは、夜目にも見えるほど眞白に白粉をつけた女が石鹸と手拭とを持つて出て來た。

それと覺しき家の前に來た時、丁度向ふから歩いて來る男があつた。それが馬橋か山田かで、向から聲を懸けられるやうなことはありはせぬかと清は恐れた。わざと左側の

垣根の方に添つて、用のある人のやうに急いで歩いた。

摩違つてからも、足を留めなかつた。突當ると、路は右に曲つて、向ふは廣い原になつて居た。淨い霧が茫と夢のやうにあたりを籠めて、向ふの兵營の窓の灯が其中にぼんやりと見えた。

清は今一度引返した。

其家の格子戸は雨戸が一枚引いてあつて、一枚明けたところから、中の入口の障子が明るく見えた。耳を欹てゝも話聲は聞えなかつた。人の居るやうな氣勢もしなかつた。

敏子が一人留守番をして居る光景がそれと想像された。

馬橋は去年の暮から『報知』に入ることになつた。三面の外交は、まだ世の中に深い經驗もない若い身に取つては餘り容易な仕事ではなかつた。それに新參では一週に一度の

休暇も取ることも出來なかつた。此頃では夜勤の方に廻されて、夜は一時過に歸つて來ることもあつた。

清には其夜のことが後まで忘られなかつた。打消しても打消しても何うすることも出來ないある一種の力――そこに離れ難ない不思議な緣があつた。

敏子と清との間は、長い間平行線で續いて來た。時にはその平行線が觸れやうとする處まで近づいて行つたこともあつた。しかし其平行線は容易に觸れることが出來ないやうな運命を持つて居た。

この平行線は、何時まで續くんだらう？『永久に觸れることの出來ない平行線――』かう思ひながら、かれは寺があつたり幼稚園があつたりする裏道を、灯の多い通の方へと歩いて行つた。

暗い三疊の一間！それも幾度となくかれの眼の前に歷々と見えた。三疊の暗い一間に寢て居る女、腹の大きい女、蒼いやつれた顏をした女――さうした想像は惡魔のやうな暗い影をいつもかれの頭に蔽ひかぶせた。時には神經的になつて頭を石に打つけて了ひたいと思ふことなどもあつた。またピストルを額に當てたいと思ふこともあつた。清は人間の心の複雜した現象に慄いたり恐れたり嘆いたりする人であつた。

三十四

若い人達は自由な、しかし困難な生活を送つて居た。移轉をするに就いての費用、今まで溜つて居た下宿屋の勘定、それを拂ふために、行李に殘された衣裳や書籍や純金の指環や、さうしたものは總て質屋に運ばれた。敏子が買つたツルゲネエフの全集も馬橋がある夜風呂敷に包んで持つて行つて金に代へて來た。

室は隨分亂雜にしてあつた。三疊には馬橋と敏子が寢た。六疊には山田が蒲團を敷いた。夜が遲いので、朝、十時過

ぎまで、雨戸が明けられずにあることもめづらしくはなかつた。

朝夕の炊事、それがまた一方ならぬ辛苦であつた。お嬢さん育ち、寄宿部屋育ちのかよわい敏子には、山の手の深い井戸の凍つた釣瓶繩は容易に手繰られなかつた。初めは新らしい興味と新しい勇氣とを抱いて、甲斐々々しく襷などをかけて、勝手元に出て働いては見たが、それも長くは續かなかつた。辛うじて汲上げたバケツの水を持つて來やうとして、霜解の惡い道に足を取られて、危く大きい腹を打たうとしてから、近所の上さん達は、若い庇髪の女の代りに今度は男達の姿を井戸端に見るやうになつた。

朝遲く女の赤い八ッ口の附いた汚れた綿衣の寢衣を着て、背の低い眼の下つた男が水を汲んでこそこそと歸つて行く

のを見ることもあつた。又ある時は背の高い頭を分けた今一人の方の男が、タオルをだらしなく肩にかけてブリキの藍色の洗面器を持つて來て、頻りに顏を洗つて居るのを見ることもあつた。

飯も敏子には滿足に炊けなかつた。火の燃えないのが第一に困つた。コッパの燒附を煙べても煙べても容易に薪に火が移らなかつた。畑が座敷住で入つて來るので、山田が行つて見ると、敏子は烟に咽んで眼から涙を出して、其中にまごゝして居た。

飯も半熟の時が多かつた。

『何うも困つた奥さんだね。』

かう山田は戯談を言つて、いつも火を燃してやつた。

それに擂木も充分には廻らなかつた。芝居にある落魄れ

たお姫樣と言つたやうな風をして辛うじて朝毎の味噌を磨つた。『今に、上手になりますよ。今に、立派なお上さんになつて見せますから』敏子はこんなことを言つて、釜や茶碗などを洗つた。

正月の寒い日が幾日かつゞいた。日影の當らない勝手元は殊に寒かつた。敏子の細い華奢な手は荒い山の手の井戸の水に赤くなつて、リスリンをつけてもつけても細い痛い皸が切れた。敏子は勝手を片附けると、いつも一しきり火鉢の傍に坐つて、赤くなつた兩手のうら表を押附けて見て居た。

『皸がきれましたね？』

かう山田が同情して言ふと、

『水が荒いのね』

敏子は恨めしさうに手の裏を返して見た。

寒い日には、釜にわざ〳〵湯を沸してそれで米を浙いだりなどした。

『僕が細君を貰ふ時は、飯の滿足に炊ける女を貰うんだ』

若い友達の一人はこんなことをわざと言つて笑つた。

後には、敏子は染々と勝手元が厭になつて來た。清の家に居る頃には、細君が婢を相手に煮炊などをして居るのを見て、何だか自分も手を出して見たい樣な氣もしたが、いざ自分がそれをするとなると、面倒な、厭な、骨の折れるものだといふことが段々解つて來た。加減に馴れないで、水鏡のやうな薄い汁が出來たり、口の曲るやうな鹹い煮附が出來たりした。

それでも馬橋は拙いとも言はずに默つて食つた。

さういふ時には、山田が乾度後で、『今日の御料理の故ですよ、こんなに咽喉の乾くのは？』などゝ輕い皮肉を言ふのが例であつた。

馬橋も炊事には不馴であつた。矢張飯を炊いたことはなかつた。で、大抵は稚さい時分から苦勞をした山田が勝手に出て、敏子の知らぬことを親切に敎へて遣つた。朝など、馬橋のまだ寢て居る間を、二人でせつせと勝手で働いて居ることなどもあつた。

山田は二人の爲めには――寧ろ敏子の爲めには、いかなる勞をも厭はないといふ風に見えた。產前の注意もしてやれば、經濟のことにも力を添へて遣つた。いつも二人で交情よささうに働いて居るので、近所では何方が御亭主でせ

うなどと噂し合つた。

『勝手元をする位なら、原稿を書いて、誰か婢を一人頼んだ方が得よ。……私、原稿を書いて御給金を出すわ。』

終には敏子はかういふことを口にするやうになつた。敏子は女の雜誌や少年少女の雜誌に、女學校の寄宿舍の實驗談だの、お伽話だのを書いて出した。一時間に三四枚は書ける筆を持つて居た。

『とう〳〵本音が出ましたね。』

山田はかう言つて笑つた。

若い友達はよく遊びに來た。有名なヒロインを見てやれなどと好奇に遣つて來るものも多かつた。中にはロシアの虚無主義にかぶれて居るものもあれば、自からデカタンを標榜して、酒と女を生命のやうにして居るものもあつた。

三人も寄ると、一間は嵐の樣であつた。議論をしたり皮肉の言ひ合ひをしたりした。髪を長く、汚れた布子を着た男だの、顔の四角な背の高い紺絣の羽織を着た男だの、蒼い神經性の顔をして常にイライラして居る青年などの間に、髪の亂れた蒼いやつれた顔をした敏子の姿が常に見られた。

『かうして居ると、"Virgin soil"の中の一章のやうな氣がしますねえ。』

ある一人はかう言つて得意さうに敏子の方を見た。

センチメントにあくがれた淸や西や田邊の時代とは、若い人達の心持が著しく違つて居た。理想の影を追ふなどといふやうな處は少しもなかつた。戀の仕方も大膽であつた。人々は其處此處から、女を探して來ては、勝手に同棲した。早稻田の奥に、あやしげな女を妻にして居るものもあつた。

女學生を懐姙させて、女の親から誘拐の告訴をされて居るものもあつた。女に遁げられて深い絶望に陥つて居るものもあつた。

同じ社に出る夥伴も一人二人はその近所に居た。いづれも學校を出たばかりの若い人達で、夜勤の時など、窓の處から、

『おい、馬橋君』

かう聲を懸けて行つた。

馬橋は働くと共に學ばなければならなかつた。三面記者などにいつまでも甘んじては居られなかつた。敏子の爲めにも豪くならなければならなかつた。かれは筆を執つたり書を讀んだりする時間の少いのを憾んだ。體も強い方では

なかつた。

机の上にはそれでも西洋の新しい小説や評論の書籍が常に載せられてあつた。

馬橋は敏子のことを『敏さん、敏さん』と呼んで居た。年齢が同じなので、戀人同士と言ふ一方には、何處か友達といふやうなところもあつた。をり〳〵衝突することがあつても、馬橋はいつも折れて出た。

社に出る時に、

『敏さん、金を持つてないか』

かう馬橋が言つて、敏子の財布から五十錢銀貨を貰つて行くこともあつた。

近所にしる粉屋があつた。客があると、敏子はよくそれを買つた。清の細君の二度目に行つた時もそれを取つて御

馳走した。婢がそのアキを取りに來た時、敏子は自分の財布を先づさがして見て、『貴方、少しお錢を出して下さいな』かう机の傍で何か書いてゐる馬橋に言つた。

清は細君に成るたけ度々見舞に出懸けるやうにさせた。『普通に結婚さへすれば、あんな生活を送らなくつても好かつたのだ。自分で遣つたことは言ひながら、憎むべきことでも何でもない。里といふほどのことは出來なくとも、子を產んで了ふまでは、度々行つて慰めてやれ。親に離れて、知らない土地で、あゝして身重になつて居るのは可哀相だから』かう清は細君に言つた。清はまあえらい

細君の出かけて行く時は、いつも大抵馬橋が居た。敏子と二人ぎりで、いろいろな話を細君はして見たかつた。しかし、さうした機會は遂になかつた。出かける準備をして

居る時でも、細君が歸るまでは、決して出懸けなかつた。其處まで出かけた途上で細君に逢つた時などは、わざ〳〵馬橋は其處から引返して來た。

平生でさへ感情的な敏子は、身重になつてから、益々神經が過敏になつた。默つて三疊の暗い處に引込んで居ることが多かつた。かと思ふと顏を赤くして、若い人達と一緒になつて賑かに笑つて居ることもあつた。馬橋の行爲に少しでも不眞面目な不熱心なところがあつたりすると、すぐ『私のことも考へて下さい』といふ風に出て來た。

多くの世間的婦性、さういふものは何うでも好い。男さへしつかりしてゐて貰へばそれで好い。今に成功させて見せる。笑つた人々を見返へるやうにして見せる。敏子は其力で自分の選んだ男を立派に成功させることが出來ると信

じて居る女の一人であつた。田舍に歸つて居る間にも、男が自分の爲めに絶望して其一生を犧牲にして了ひはしないかといふことが、戀そのものよりも大きな問題であつた。それほど敏子は自己の力を信じて居た。敏子に取つては馬橋から不眞面目な不熱心な態度を見せられるのが一番辛かつた。

『私の心も知らないで――』

敏子はいつもかう言つた。

馬橋に取つては、それが何だか自由を束縛されるやうな氣がして厭であつた。そんなことは言はれなくつても遣つて行くといふ腹もあつた。『貴方の爲めにこれほど犧牲になつて居る』といふ敏子の態度や言葉にも段々慊らなくなつて來た。

『だつて、そんなこと言つたつて仕方がないぢやないか』

後にはかう云つて、女に反抗の語氣を見せることもあつた。

過去の快樂が歷々と振返へられる頃には、二人の前には重い苦しい現實の錘が既にその束縛を確實にして居た。二人は戀の爲めに大きな犧牲を拂つて居たことを思はぬ譯には行かなかつた。

其頃、馬橋は社で『暗黑の東京』と言つたやうな外交方面を預けられて、二三人の同僚と一緒に、日比谷公園だの、招魂社だの、濱町河岸だのといふやうな處を夜中にぐるぐる廻つて歩いた。女と男とがベンチに凭つて何か密々話して居るのを樹の間の闇から覗いて見たり、夜目にもそれと解るほど白粉をつけた若い女が軒燈のぼんやり點いた細い

露路に入つて行くのをつけて行つたり、時には評判の女學生の秘密を探ぐるために、二時間も其家の周圍をぶらついて居たことなどもあつた。

ある有名な音樂家の弟子で且つ情婦であつた一女學生を訪問した夜は面白かつた。女は新聞記者だと聞いて容易に逢はなかつた。風邪を惹いて臥て居るとか何とか言つて、逢はない算段を頻りにした。それを威嚇したり賺したりして、漸く十分ほどの約束で戸外に連れ出した。くつきりと拔出るやうな色の白い美しい女であつた。馬橋はそれと並んで歩きながら、兼ねて探つて知つて居る其女の秘密を少しづゝ話して、それに對する返答の中から更に深い秘密の眞相をさぐり出さうとした。女はそれを新聞に出させまいとして、泣いたり賴んだり訴へたりした。墮落の道に陷ち

て行つた經歷などをも哀れつぽく同情を惹くやうに話して聞かせた。しかしそれも甲斐がないといふことが解ると、今度は柔かい體をすり寄せたり、わざと手を握つたりして、頻りに色仕懸で持ちかけて來るのが馬橋にも解つた。

女は今では音樂家と手を切つて、今居る家の男に身を任せて居た。女に取つては、新聞に書かれるのが非常に辛かつた。十分と言つたのが三十分ほど經つても、二人は猶閨の中に立つて話して居た。其處に、其家から出て來た太いステッキを持つた大きい男が、ツカツカ進つて來て、『貴樣は何だ！』と突然誰何した。馬橋はその太いステッキの一擊を覺悟しない譯には行かなかつた。男は『人の家の娘を二十分も三十分も戸外に引張り出して居る奴があるか、いくら新聞記者だッて用捨がならん』かう凄じい語氣

を見せたが、それでも別段ステッキを振廻しもしなかつた。

やがて女を伴れて家に入つて行つた。

時には早稲田の新開町の曖昧屋に、職人の服裝をして、探檢に出かけて行くことなどもあつた。夜の東京には、思ひがけない暗黑なことや猥褻なことが數限りなく行はれて居た。

馬橋はそれからそれへと材料をさがして歩いた。十二時過ぎになると、電車がなくなつて、歩いて歸らなければならぬやうなことも度々あつた。かれは毎夜刺戟された頭と疲れた體とを抱いて山の手の自分の家に歸つて來た。

三十五

『手が要るやうなことがあつたら、お三輪嫂さんの處にすぐ頼みに入らつしやい。宅で、さう話して置いた筈ですから——』かう細君は敏子に言つた。

敏子の出產の時の世話をある時清がお三輪に頼むと、

『私で出來ることなら何でもするがね。御易い御用ぢやともねえ……。近いからいつでも出懸けて行つて上げますとも』

かうお三輪は氣輕に承知して、

『本當にまア……立派な家のお嬢さんが、見ず知らずの人の中に來て、一人で御産をするッて言ふのは大抵なことぢやないがね。』

かう同情もした。

『辨天町の家に來る時分には、綺麗な別嬪さんぢやつたがね。』

こんなことをも意味ありさうに言つてわざと清に笑ひ懸けた。

二月の末のある寒い夜であつた。産婆のお桂さんが鳥渡お三輪の家に寄つて、

『今夜あたりお産がありさうですよ。今、迎へに來て、これから行く處ですの』かう知らせて行つた。

寢衣も着改へずに心待に待つて起きて居たが、十二時が

過ぎてもその迎への者は來なかつた。さうした處を見られるのが流石に耻かしいのだらうと思つてお三輪は寢たが、不圖眼が覺めると、誰かゝ低く戸を叩いて居た。

もう夜は明け放れて居た。寒い寒い朝であつた。戸外には山田が汚れた襟卷をぐるぐる卷附けて寒さうにして立つて居た。山田も馬橋も一二度此家に訪ねて來て、お三輪とはもう懇意の間柄であつた。

『何うしたね？』

『生れましたよ、女の兒が――』

『安産かね？』

『えゝ二人とも達者なやうです』

『それは結構ぢやつたね！私、今これからすぐ行くがね。』

『え、……何うぞ……男二人だものですから、何んにも解

らなくつて困つて了つたのです……御氣の毒ですけど、御差支がなければ、鳥渡入らしつて戴きたいんですが……」

『え、今、すぐ行きますよ。』鳥渡氣を變へて、『產婆さん、まだ居るんでせう？』

『え、今まで居ましたけれど、急に又一つ出かゝつて居るのがあるッて、跡を片附るとすぐ行きました。』

『さうかね、忙しいこつちやね』かう言つて、『それぢや後からすぐ行きますから。』

山田が歸つて行つて間もなく、お三輪は準備をして出懸けた。丁度其時隣の秀子が眠むさうな顏をして、入口の格子の雨戸を明けて居た。お三輪の姿を見て、

『をばさん、何處に行くの？こんなに早く』

『何處だか、當てゝ御覽よ、好い處よ。』

と笑つて立留る。

『好い處ッて、何處？』

『好い女の兒が生れたんだッて』

『女の兒？』秀子は鳥渡考へて、手を打つて、『敏子さんの？』

『さうさね』

『女の兒？今、生れたの？』

と、秀子は眼を瞬る。

『好い兒だッて、……今、知らせに來たのよ。』

『さう……私も見に行かうかしら』

『お出でよ、さア』

とお三輪は相變らず戲談を言つて通つて行つた。

お三輪が行つて見ると、暗い三疊に白い顏を見せて、敏子は寢て居た。傍には生れた兒が寢かしてあつた。

『御目出度う御座いましたねえ。』

覗くやうにしてお三輪が言ふと、敏子は莞爾と笑つて見せた。

馬橋はまご〳〵して居た。汚れた女の綿衣を着て、袖の長いのを捲りながら、頬りに勝手元を出たり入つたりして居た。『何うも御呼立てして済みませんでした。男には何にも分らないものですから』かう言つて、角火鉢の前にお三輪を坐らせた。

『好いお兒ちやね、馬橋さん。』

例の頓狂な調子で言つて、

『それでも輕かつたんですか？』

『え、重い方ぢやなかつたんです。』

『結構でしたねえ。』

馬橋は笑つて、『それでも生れた時はまごつきましたよ。湯が沸いて居なかつたものですから』

『それはさうでせうねえ……男の手ではねえ、』

『昨夜、僕の歸つて來たのは、二時過なんでせう。それからゴタゴタして、とうとう寢る間はなかつた』かう言つてらゴタゴタして、とうとう寢る間はなかつた』かう言つて馬橋は充血した眼を摩つた。

『そんなことを言ふけど、一番苦しんで居た時分は、君はグウグウ寢て居たぢやないか』勝手から入つて來た山田は、それを聞いて、其處に立つたまゝかう言つた。

『さうかな……そんなことはありやしまい』

『だつて、生れた時は君は寢てたぢやないか。』

『さうかな、少しウトウトしたかな……お產の時の唸聲といふものは、餘り心地の好いものぢやない』

産れるまでの苦痛、産婆に頼まれて、山田は敏子の腰の處を強く押して遣つた。産婆の來ない前にも、苦んで居る女の下腹を摩つてやつた。

『山田君は男性と女性とを兼ねたやうな重寶な處があるよ。君が居て呉れたんで、僕は大變助かつた。』

馬橋はこんなことをも言つた。

何の氣なしに勝手に入つて行くと、足を踏み立てられないやうな亂雜な光景が先づお三輪の眼に映つた。産湯を使はせた盥がまだ其儘にしてあつた、四邊にはコッパだの燒つけだのが一面に散ばつて居る。釜には柄杓が入れられたまゝに蓋が取つてあつて、其處から湯氣が白く立つて居る。

バケッや炭俵やお膳や――濁した水はそのまゝに凍つて、歩くと板の間がツルツル滑る。七輪にはから火が活々と起

つて居た。

『まア――これは大變ちやね』

お三輪は思はず聲を立てた。

竈一つ、釜一つ、棚の上のビールの空罐が二三本ころがつて居る他には、何もないといふやうな貧しい生活の中で、あの學問の出來る美しい敏子が、かうしてお產をするといふことは、お三輪には可哀相のやうでもあり、不思議なやうでもあつた。

『さア、片づけませう、餘り散かつてゐるぢやないかね』

お三輪はかう言つて、持つて來た褌をかけに懸つた。

產婦の爲めにお粥を煮たり、汚れたものを片附けたり、紅絹の片を丸くして生れた兒に砂糖水を飲ませたり、幾度

もかういふ世話に馴れたお三輪は、別にそれを苦にするでもなかつた。

『奥さん、まア、お茶でもお上んなさい。』

産室に居るお三輪を山田が座敷で呼ぶので、暫くして行つて見ると、口の缺けた土瓶に番茶が滝れてあつて、茶湯臺の上には、食麺麭がごろごろ轉つて居た。

『今朝は御飯は炊かないのかね』

かうお三輪が訊くと、

『えゝ、これで間に合せて置きました。』

『それぢや、家で炊かせて持つて來て上げれば好かつたねえ。』

『いや、僕等はこれで澤山……。平生でも面倒臭いと、よくこれで間に合せて置くことがあるんです。』

『簡單でせう、僕等の生活は。』

馬橋は傍からかう言つて、食ひかけた麺麭をムシャムシャ食つた。

『奥さん、一つ何うです？』

馬橋が笑つて言ふと、

『私は麺包は真平』

とお三輪は手を振つて見せた。

お三輪はまだ朝食前であつた。昨日の飯も殘つて居なかつた。

『御飯が無くつちや何かにつけて困るでせう。私、炊いて上げやうかね。』かう言つて、お三輪は勝手元に行つた。米櫃には一度炊く位の米しか殘つて居なかつた。

それでも若い人達は樂しさうであつた。馬橋は產室に入

つて長い間何か睦しさうに話をして居た。笑ふ聲もをりを り其處から洩れて來た。例の『敏さん、敏さん』と呼ぶ調子も異樣に聞えた。

お三輪の今まで見て來た家庭では、かうした主婦は餘りなかつた。難かしい姑に虐待される嫁さん、鹿角らしい顏をして居る旦那さん――男が他人の前で女に白い齒を見せるやうな習慣は餘り見たことがなかつた。表面は從順に見せかけて、眼色や態度で男の心を奪ふのが、由來お三輪達の見たり遭つたりして來た世の中の狀態であつた。何んなに交情が好くつてもそれを表面に表はせない處に面白味があつた。お三輪には何も彼も目新しく見えた。

『若い人達は若い人達さねえ』

かうお三輪は、其日の午後に報知を受けて見舞に來た清

の細君に言つた。

細君は水飴の鑵を見舞に持つて來た。馬橋は出勤しても う居なかつた。山田も晝飯をすますと、用事があるとて出かけて行つた。

『好い兒ね、似てますね、敏子さんに。』

細君はかう言つて、傍に寢かしてある兒を見た。

『先生は御留守ですつてね』

敏子は暫くしてから細君を見て言つた。

『何うして知つて居て？』

『何かに出て居たと見えて、宅で、さう言つて居ましたから』

『さう』

清は二三日前から友人二三名と田舍に小旅行をして居た。

三十六

兎に角七夜までは、お三輪が泊つて世話をして遣ることになる。で、日が暮れてから、山田が出懸けて行つて、其家の少年と一緒にお三輪の寢道具をかついで運んで來た。

『や、產れたな、どれ見せろ』

こんなことを言つて、づか〳〵三疊に入つて行く友達もあつた。

『何うも生れ立ての赤坊ッて言ふものは汚ないもんだな：：。それでも愛情なんて言ふものが起るかえ？』

ある友達がかう言ふと、馬橋は、

『愛情なんて、起るッて言へば起るとも言へるんだらうが、それほど際立つたもんぢやないねえ。何うも矢張汚いよ。肉の塊のやうな氣がするよ。』

『これが大騷ぎをやつたラブの塊だと思ふと厭になるねえ』

『まア、さう言へばさうさな』

と馬橋は笑つた。

『兎に角、これで一安心だねえ。名を何と附けたえ？、僕がつけてやらうか。』

かう言つて歸つて行く人もあつた。

お目出度いなどと言つて行くものは一人もなかつた。それに、產婦が隣の間に寢て居るのにも頓着なく、大きな聲を立てゝ、議論らしいことを長い間饒舌つて行つた。お三

輪が挨拶をしても碌々それに調子を合はせるやうな人もなかつた。

お三輪は滿更書生生活を知らぬ譯ではない。死んだ夫が免職になつて困つて居る時分には、其家の一間に早稲田に通ふ書生を置いたこともある。それから淸が細君を貰つた當座によく訪ねて來た書生さんの群も知つて居る。矢張解らぬ議論は常にしたが、しかしこんな風ではなかつた。

『隨分いろいろなお友達がお有んなさるね』

わざとかう馬橋に言ふと、

『暢氣な男ばかり居るでせう？。あれで綺麗な嚊を持つて居る奴もあるんですせ』

かう平氣で馬橋は言つた。

それに比べると山田は、丸で態度が違つてゐるやうにお

三輪には見えた。かれはさういふ群の中に交つて話などをして居ることは稀である。それに話も合はぬらしかつた。

乳が何うも思つたやうに出なかつた。翌日產湯をつかはせに來た時、產婆は觸つて見て、『こんなに張つて居るんですから、乳がないッて言ふ譯ぢやないんですねえ、かうやッて……』と揉む眞似をして見せて、『成るだけ、自分で揉むやうにして御覽なさい。それに誰か男の方に吸つて貰ふと好う御座んすよ。道が開くと、ズンズン出て來ますから』

夕飯の時に其話が出て、

『何うだ、僕が一つ吸つてやらうか』

笑ひながら、山田が言ふと、

『いかん、いかん、君など吸つちやいかん』

馬橋はかう言つて笑つた。

『しかし亭主に吸つて貰ッたんぢや駄目だッて言ふせ。』
『そんなことがあるもんか。』
『本當だよ、産婆がさう言つて居ましたねえ、奥さん』
かう言ひかけられてお三輪はわざと、
『え、え、さうですッて』
『だッて、君なんぞ吸つちやいかん。』
馬橋が大眞面目なので、山田も終にはくす〳〵笑ひ出した。
『何うぢやね、まア。本氣にしてるがね！』
お三輪もふき出して笑つた。

三十七

四月のある晴れた日に、清が社から歸つて來ると、玄關の靴ぬぎに、見馴れない二枚草履と桐柾の駒下駄とが並べて置いてあつて、座敷で話聲が聞えて居た。
障子を明けて細君が迎へに出たが、
『おや、貴方ですか』
と言つて聲を低くして、『敏子さん、馬橋さんも一緒に』
『フム』
わざと平氣な調子で清は言つた。しかし一種の鼓動を心

に覺えない譯には行かなかつた。かれは其儘居間に入つて、洋服をぬいだり、ネクタイを外したりして居たが、後から和服の不斷着を被せかけた細君は、

『もう、歸るッて言つて居たのよ』

『餘程前から來た？』

『一時間ばかり前』

かう言つて、顔を寄せて、

『子供も連れて來たのよ』

『フム』

清は帶をしめて、襪をぬいで、箪笥の上に置いてある足袋を穿いた。何處となく氣が落附かないといふ風で――座敷に入つて行くのが何だか心を讀まれるやうな氣がするといふ風で、暫し其處にまごゝして居たが、やがて煙草箱

と煙管と吸ひかけた敷島の袋とを一緒につかんで、わざと勢好く裏の縁側に足音を立てゝ座敷に入つて行つた。

襖を後にして、敏子は子供を抱いて坐つて居たが、其眼と清の眼とは電氣のやうに忽ち相觸れた。

敏子はすぐ低頭いて了つた。

『や』

と清は聲を懸けると、馬橋は少し席をいざつて、丁寧に挨拶をかへした。

『よく遣つて來ましたね』

馬橋に言ふでもなく敏子に言ふでもなく、間の抜けた異樣な調子で、清はかう續けて言つたが、其儘わざと敏子の方に視線を向けた。

其顏の赧いのを敏子は見た。

いろいろな思ひの胸に集つて來るのを抑へて、『大變大きい丈夫さうな兒だね、どれ、此方を向けて見せ給へ！』

かう清が言ふと、敏子は顏を赧くして例の表情のある眼をちらと清の方に閃めかしたが、やがて微笑を頰に浮べながら、子供の顏を此方に向けて見せた。

敏子の頰の著しく痩せたのを見て、清は悲しいやうな氣がしたが、『おゝ、いゝ子だ。肥つてる。貴方によく似てる。』

かう言つて、俄かに話頭を馬橋の方に向けて、

『それでも好く出て來られたね。――此頃は社が忙しんだらう。』

『え、忙しいッて言へば忙しいんですけれど、さう言つてると、いつまで經つても來られませんから』

『それでもちつとは馴れたでせう？』

『え、此頃は夜勤の方は人にやつて貰うことにしましたから』

『夜勤は辛いだらうねえ』

『え、私の遣つてる頃は、寒い時分でしたから辛かつたです』

男達の話して居る間に、敏子は少しく心の餘裕を得たといふやうに、子供を抱き改へて居住を直した。紬の衣服に銘仙の羽織を着て、繻子と縮緬の腹合はせの帶をしめて居た。髮の薄くなつたのや、肩の痩せたのなどが著しく眼に立つた。眼の周圍にも、濃い深い影が生じた。

其處に入つて來た細君は、

『頂戴物をしましたから』かう言つて床の間の方を清に見せた。其處には、此間祝つて遣つたおかへしのつもりのお

目出糖一箱と紅い頬のやうな林檎を入れた籠とが置かれてあつた。

『そんな心配はしなければ好いのに』

『いゝえ、もつと早く上らなければならんのでした。』

馬橋はかう挨拶をした。

新聞社の話や、文壇の話や、初めて家を持つた時の經驗話や、さういふ話を男達のして居る間を、敏子と細君とは女同士のするやうな話を何彼と話した。やがて細君は敏子の腕から子を抱き取つて、

『ほら、御覽なさい。こんな可愛い顔をしてゐる。貴方のお孫さんですよ。』

わざと戯談にこんなことを言つて、清の方に向けて見せた。

お孫さん！この一語は餘り一座の心持に伴つたやうにも見えなかつた。清は苦笑するより他に仕方がなかつた。敏子は眞面目な顔をして默つて居た。

『隨分、子供を育てるのは大變でせう？』

その沈默を破る爲めにかう清が敏子に言ふと

『えゝ』

と言つたきりで、敏子は眼を下に落して了つた。

『何うしても始めては大變ですよ』細君は傍からかう言つて、『それでも、敏子さんのは乳が澤山に出るから、そんなにお困りぢやないでせうが、私の總領の時などは、それは大變でしたよ。夜半でも、枕元に湯を沸して置いて、泣き出すと、宅で起きてミルクを解くといふ騒でしたから』

前に幾度も聞いて知つて居ることを細君は言出した。

流石にいろいろなことが思ひ出されるといふ風で、敏子は何となく沈み勝にして居た。藝術にあくがれた若い心が僅かな年月の間に、かうした運命の途を取つて行つたといふことが、敏子にも清にも深いある意味と感慨とを齎らさずには置かなかつた。清の言葉も兎角途絶え勝であつた。

敏子は馬橋に歸る目配をした。

『さア、好う御座んすよ。何うせ、田舍で何も無いですけど、今、準備をさせましたから』

かう言つて、二人の暇を告げやうとするのを、細君は遂つて留めて、其儘茶の間の方に行つた。

清は言葉を改めて、馬橋に言つた。

『それで、何うしました、結婚の屆は？』

『まだ、國から何とも言つて來ません。面倒なものですか

ら、投つて置くと見えるんです』

『困るねえ！』

馬橋の籍はある田舍の寺の戸籍に入つて居た。幼い頃父を亡つたかれは、其寺で成長くなるやうな不仕合な運命を有つて居た。母親は再縁して大阪に居た。僧籍から離れなければ、公の結婚屆は出せなかつた。

『早く、誰れかに頼んで、屆けが出せるやうにして貰はないと好かんねえ。放つて置くと、役場の方は好いとしても、子供が學齢になつても、學校に上れないやうなことになるからねえ』清はかう言つて考へて、『君達には、まだ子供の問題などさう重大に考へられないでせうけれど、さういふ事情で、あとで困つてゐる人は隨分居るよ』

『早速運ぶやうにします』

馬橋はかう早口に言つた。

一緒にするなら終生の恨、かう敏子の父は嘗いて寄した。清の身にしても、結婚をさせるのは餘り好い心持ではなかつた。それに、馬橋の性格にもまだよく飲込めないやうなところがある。正式の結婚を延して居るのも、何か他に理由があるのではないかといふ疑ひもあつた。

しかし清はそれを顔には現はさなかつた。『本當に、一つしつかり遣つてくれたまへ。過失は過失で、過去は問はないことにして、これから大に眞面目にやつて貰はなくつては……』かう言つて清は若い人達の方を見た。

馬橋は笑ひながら、

『遣れる丈けは遣つて見る積です。』

かう言つて、すぐ言葉を續いで、

『けれど何うも貧乏で困ります。働くだけで體が疲れて了ひますから……何うも矢張體が丈夫でないと駄目ですな。』

『まア、然し、そんなに焦つたって仕方がないがね。』

『まア、遣るだけは遣つて見ます』

馬橋はかう繰返して言つた。

やがて細君はお膳を運んで來た。さし身に吸物に鹽燒。わざわざ引留めたほどの御馳走もなかつた。

それでも麥酒のコップは添へてあつた。

清は立つて罐の栓を拔いた。馬橋のコップにも、清のにも驀て波々と注がれる。辭退する敏子のコップにも半分ほど細君が注いだ。

敏子は子供の襁褓の濡れたのを先程から氣にして居たが、